

すぎかえる 263 号

# 太陽・沈黙

神戸大学児童文学研究会

GON OUT

BACKSON

BISY

BACKSON

( “The House at Pooh Corner” )

がいしつ

すぎかえる

いすがし

すぎかえる

(「プー横町にたった家」)

\* \* \* \*

フクロは、もういちど、そのはり紙をながめました。フクロくらい教育のあるものになると、はり紙をよむことなどということは、ぞうでもないことです。

「がいしつ　すぎかえる　いすがし　すぎかえる。」

いかにも、はり紙に書いてありそうなことじゃありませんか。

「万事、明白ではありませんか、ウサギさん。クリストファー・ロビンは、スギカエルといっしょに外出されたのですよ。最近、あなた、森のどこかでスギカエルをお見かけにはならなかったかな？」

「さあ、わからない。」と、ウサギはいいました。「それが知りたくて、きみのところにきたんだ。スギカエルって、どんなもの？」

「さよう。」と、フクロはいいました。「ぶち、または草食性のスギカエルはどんなものかといえ——」

（「プー横町にたった家」）

# 目次

テーマ作品 太陽

汀線イリデッセンス——紙漣遙梅

11

ひまわり——黒田ももん 21

テーマ作品 沈黙

送り花火——黒田ももん 43

プロット交換小説

春眠に風ぐ——黒田ももん 61

コスモス——水面みなも 85

山の声——作花霖 97

テーマ外作品

サボテンと犬

谷山大哉

神殿（冒頭）

赤坂栗助

あとがき・編集後記

157

147 117





テーマ作品

太陽



# 汀線イリデッセンス

紙瀨遙梅

ハニーメープルの甘い香りがふわり、昼下がりのぬるい空気を追い越してきた。彼女の訪れを報せる先ぶれだ。

読みかけの図鑑に葉をはさんでティーカップをふたつ取り出したところでチャイムが元氣よく鳴って、次の瞬間には真っ赤なボニーテールが玄関口から飛び込んでくる。

「しずちゃんこんにちは！ 今日もクッキーいっしょに食べよ！」

「こんにちは、もみじ。今からお茶を淹れるから、ちよつとだけ待ってね」

「はーい！ いつもありがと！」

たった二週間ですいぶん懐かれたな。この海の見える町に越してきて以来、わたしの仕事はもっぱら、お隣の焼き菓子屋さんの一人娘の話し相手になることだった。優に十はあるはずの歳の差なんてもはやないも同然で、呼び名もいつのまにやら「しずりさん」からかわいい愛称に変わっている。

ガラスポットの中で躍る気泡をふたり並んで眺めて、他愛もない話をして茶葉がすっかり蒸れるのを待つ。小学校での流行りの言葉。授業で習ったことば。窓越しに見かけた桃色の鳥。校舎の裏に生えていた野草。無軌道にいろんな話題を連ねながら紅茶を淹れるこの時間が心地いい。

「しずちゃんは今日なにしてたの？」

「のんびりと宝石図鑑を読んだ。不思議な力がある宝石とかが載ってるやつ」

「ほうほう、たとえば？」

「そうだな……。『ながれぼしの心臓は どんな宝石よりもうつくしく かがやき 持ち主のねがいごとを 密かに叶える』とか」

「おお、それはロマンだねえ」

ロマン。わたしの暮らしを聞いたもみじからよくこぼれ出ることばだ。この間訊ねたところ、もみじの目に映る世界はロマンに満ちみちていて、恐竜のたまごの殻のかげらとか、外国の小説本にあった印字の間違いとか、いろんなところからロマンは顔をのぞかせる、らしい。

脳裏にある「もみじのロマン判定メモ」に項目をひとつ書き足したところで、茶葉の蒸らし始めから体内時計でだいたい五分。そろそろ仕上げの時間だ。ふたつのカップにお茶をついで、綿雲のミルクも投入。角砂糖を落としたほうをもみじに渡せばティータイムの準備は万全だ。

いただきますを交わしてクッキーをさくり。おいしい。

続いてミルクティーも一口。おいしい。

ひとしきりお茶を堪能したところで、そうだ、ともみじが瞳を光らせた。髪色よりもさらに深い真紅の、ロマンを感じ取るその瞳のきらめきに、わたしの心も次第にたかぶっていく。

「ね、見つけにいこうよ、『ながれぼしの心臓』を！」

夏の色を未だに残した陽射しがこれでもかと肌を灼く。暑い。そして痛い。カーテン越しでない太陽光を浴びるのはそれこそ二週間ぶりだ。波が砂を浚うリズムに共鳴して苦悶の声を上げるわたしの三步前から、わたしをお天道様の下に引っ張り出した元凶がふり返って朗らかに笑った。

「しずちゃんもつと家から出て運動したほうがいいよ！」

「うう……そうしようと思っではいる、んだけどね……言うは易く、行うは難し……」

「まったくもうー」

しずちゃんはそのばつかり、ともみじがお小言を転がし、またふり返って歩き出す。

わたしともみじは『ながれぼしの心臓』を探すべく、ひたすらに浜辺を歩いていた。この町では三か月ほど前に流星雨があり、海の方へ降り注ぐぼしの群れを見た、ともみじの同級生が言っていたそう。その時のぼしが浜辺に流れ着いたら見つけられる、というのがともみじの考えた作戦らしい。

ほし。そらに白く輝くもの。ひとの願いを叶えるときにその輝きを収めて地に落ち、地上では

ただ沈黙を貫く……というのがわたしの持つほしの知識の大略だ。

燃え盛る光に抗いながら漂着物に視線を這わせてみる。輪になったゴムチューブ、コルク栓付きのガラス瓶、誰かしらのサインが彫られている枯れ枝。どれもほしではなさそうだが、と思ったところで、わたしはほしがその上にいないときの色形を知らないことに気が付いた。

「もみじ、ほしの見た目ってどんなのかわかる？」

「わかんない！ でもたぶん見たらビビっとわかるような見た目なんだと思うよ」

「そういうものなんだ、ほしって」

少しづつ傾く日を背負い、昼と夕方のすきまにふたり。順応もあつてかだんだんと身体も楽になってきた。

「……ちなみに、その予感もロマンってやつ？」

「これは……ロマンじゃなくて空想！」

ロマンではないらしい。「もみじの非ロマン判定メモ」に追記。

「やつほし、もみじっち。で、はじめましておねーさん。どしたのこんなところで」

「かざちゃん！ えっとね、この前かざちゃんから聞いたながれぼしの……」

東の水平線から夜が昇りだしたころ、ながれぼし捜索チームのふたりは淡いヒスイの色の少女に遭遇した。

どうやらもみじが流星雨の話聞いたのは彼女からだっただけらしい。名前はかざね。岸の近くの風車小屋に住んでいるのとか。

「で、ふたりは落ちてきたほしをさがして、あわよくば心臓も見つけちゃおって心積もりね」

「そういう流れ。ながれぼしの居場所、かざねは何か知ってる？」

「うーん、あたしも流星雨をたまたま目撃したっただけで手掛かりはなあ……つとと」

満ち潮が近いのか、ちよつぷり勢いのついた寄せ波がかざねのサンダルを薄く撫でる。

揃って少しあかずさ。水平線より向こう、数分前よりもずっと深まった藍が時の流れを告げている。いつもならもみじが自宅に戻る時間だ。頃合かな。

「そろそろ——」

「あ！」

わたしが口を開くと同時、かざねが手を打った。そしてニヤリと笑う。

「そーいーやいたわ、ほしに詳しそーなやつ」



「おねーさんおねーさん、もつとこどもに戻ってみよーよ」

「……。ええと、つまり？」

かざねが話した「スイセイのかけら」のねぐらへの道中、宵闇と街頭の下。いつまで経っても元氣充分なもみじの背を追うかたちで足跡をのぼしていると、かざねが歩幅をあわせてきた。

「あたしも帰る時間を過ぎちゃいそうなところだけだね。もみじつちと冒険するときはねー、見守り役になるより同じ目線でいっしょにはしゃいだほうが楽しいんだよ。もみじつちの素直な感性をちよいと借りてやるつもりだね」

感性を借りる。同じ目線……。同じ視座から世界を見る。

「……なるほど」

なにかの片鱗を掴んだ気がする。あじわい慣れない高揚感。もみじの瞳の奥のちからのような。

「ねえ、もみじ」

「なーに？」

自然と速まった歩速のままに、もみじの弾む背に声を掛ける。

「もしかして、夜ふかしして浜辺を歩くのって、ロマン？」

肩越しにこちらをのぞく真紅の瞳が、おおきく瞬いた。

「これはロマン！」

「スイセイのかけら」のねぐらは海と陸のすきま、汀線に浮かんで揺れていた。灰と石を固めてできたようなたまご型のねぐらから、これまた灰と石の色をした小人がちゃんと顔を突き出している。

「スイセイさんこんにちは！」

『こんにちは、こんばんは。ボクは彗星の欠片。大丈夫、キミたちの会話は聞こえていたよ。ボクはキミたちの問い求める真実を知っている。その通り。そしてあれらはもうすぐ見られるよ。そう、聴こえているとも。そうとも言える。そうだね、キミの言う通りだ』

「スイセイのかけら」の唇がカクカク動いたび、耳の裏をすり抜けて、灰の滑るような声が伝わってくる。わたしたちのことばが喉から出るよりも早く彼は返事をした。

『申し訳ない、何せもうすぐなんだ。星のめぐりは止まらないからね。さあ来るよ、波打ち際を

見つめて。三、二、一……』

ことばが後から来る。彼に言われる前からわたしは波打ち際を注視していたし、最後に彼が届けてくれる説明はもうわたしの頭に入っていた。ふしぎな高揚感。心が早鐘を打っている。

そしてただひとつ、秒読みだけが時間に沿ったままやってくる。

昇る月光の差し込む汀線が、一瞬、虹の色に輝いた。

例えるすべのない美しさがわたしの瞳の奥に吸い込まれる。

まばたきのうちに虹色は隠れ、後には月色の引き波だけが残る。

『今のが「ながれ星の心臓」だ。完全に海に溶け込んでしまった彼らの心臓は、一日の最初の月光からだけ光を受け取る。そしてそうだ、わたしもいま還る。逢いたいのなら、また明日』

彼の声がほんとうに耳に届いたときには、彼はとつくにねぐらに収まっていた。

もみじと、かざねと、たがいに顔を見あわせる。わたしの瞳の奥にはきつと、あの虹色の汀線が瞬いている。

「これが——ロマンだね」



# ひまわり

黒田ももん

その少女は、ひまわりみたいな人だった。

彼女が少女をはじめて見たのは、いつも寄っていたひまわり畑のことだった。放課後、ひまわり畑の日陰で、ひとり静かに本を読むのが彼女の日課だった。けれども、その日はめずらしく先客がいた。それが少女だった。

夏の日差しを浴びるひまわりの中、その少女はランドセルをがたがたゆらして、元気いっぱい走り回っていた。軽く結んだきれいな黒い髪がぱたぱたとせわしく動くのを、サーカスでも見るような気持ちで、彼女はひまわり畑のそばからながめていた。

少女をながめる彼女の目の前に、一羽のチョウが横切った。ひまわりと同じ黄色がきれいなアゲハチョウだった。と、あの少女が畑から勢いよく飛び出してきた。思わず体をのけぞらせた彼女の真前で、少女は「あつ、ごめんなさい！」と明るく笑った。そしてそのまま、ひまわりの間に消えていくチョウを追いかけていった。

チョウの羽がゆつくりと動いた。少女の髪がゆれた。少女は、チョウをつかまえようとしているようだった。ひまわりの間から少女の黒い髪の毛がちらちらとぞいて、それが何だかアゲハチョウの模様みたいに見えたことを、今でも彼女は覚えている。さわやかな夏のことだった。

彼女はとなりのクラスの子だった。明るくてクラスの人気者で、いつも友だちをたくさん引き

連れてかけっこをしていた。足が男子よりもずっと速く、陸上の大会にも出るほどだった。人見知りな彼女とは、似ても似つかない、別の世界の人だった。実際、ほとんど話したこともなかった。きつとこの先もずっと、関わることはないと思っていた。

高学年になったある日、彼女は一カ月ほど入院することになった。家の階段で転んで、足をケガしたのだった。少しずつ夏が近づいていたときのことだった。

最初の数日は痛みで落ち着かなかったけれど、慣れてくるとヒマなもので、彼女はよく親が差し入れてくれた本を読んでいた。親が新しい本を持ってきてくれるのが待ち遠しかった。

午後のおだやかな日の光に照らされていると、彼女はよくひまわり畑を思い出した。学校帰り、母がパートから帰ってくるまでの間、いつも一、二時間ほど過ごしていたひまわり畑。地域のこいの場ともなっているその場所を見つけたのは、彼女が低学年のときだった。夏の暑さも、背の高いひまわりの影にさえぎられて、とても心地よかった。花のかおりを吸いこみながら本を読んでいると、まるで物語の世界に迷いこんだような気持ちになったものだ。

彼女は静かに本を読み進める。ページをめくるたび、ひまわり畑のなごやかな光が頭上から降ってくるような気がした。もう、ひまわりは咲いているのだろうか。あの場所にはいつも、太陽のかおりがあふれていた。夏にしか味わえない、彼女が愛してやまないにおいだった。

そんなある日のことだった。彼女のとなりのベッドに、あの少女が入院してきたのだった。明るく元気いっぱいな少女は、どうやら足の病気になったらしかった。

少女が入院してきた日、彼女は思わず目を丸くしたものだ。まさか同級生がとなりのベッドに入院してくるなんて！ どう反応していいかわからず、もじもじしている彼女に、少女は「こんにちは！」と笑いかけてきた。お日さまみたいな笑顔だった。

学校で目立たない彼女のことを少女は知っていたようで、「となりのクラスだよね！ おんなじ学校の子がいるなんて、びっくり！」と手をたたいて言うのだった。けれども、いつかひまわり畑でたまたま出会ったときは、さっぱり覚えていないらしかった。

少女には、毎日たくさんのお見舞い客が訪れていた。親はもちろん、学校の友だちに先生、スポーツクラブの知り合いから親戚のおばさんまで、本当にたくさんの方が少女のベッドへとやって来た。学校の人がやって来たときは、彼女は気まずさを感じたものだが、お見舞い客たちはそんな彼女にはまったく興味がならしく、いつも少女のベッドを取り囲んでいた。

見ているだけで疲れてしまいそうなくさんの人々の中心で、少女はいつも元気いっぱいに笑っていた。その姿は、殺風景な病室の中に咲いた、一輪のひまわりのようだった。

まぶしい太陽から目をそらすみたいに、彼女はいつもベッドの中で縮こまって、少女らの笑い



声を聞いていた。彼女のところには、お見舞い客なんて家族のほかはほとんど来ない。やっぱりあの子は自分とは違う世界の人——それこそ、物語の主人公みたいだ、と彼女はこっそり思っていた。

けれども、毎日やって来るお見舞い客にいちいちおびえて、いつまでも縮こまっているわけにもいかない。少女たちがわいわい話をしている横で、彼女は絵を描くようになった。だいたいの本は読み終わってしまったて、両親が新しい本を持ってきてくれるまで、することがなかった。

楽しそうに盛り上がっている少女たちを横に、彼女はひまわりの絵を描いた。花びらをひとつひとつ地道に描いていくと、少しだけ居心地の悪さも忘れられた。色えんぴつでぐりぐりと色をぬってあげば、あのひまわり畑の風が病室を吹きぬけるような気がした。けれども、絵の中のひまわりは、本物よりはやはりどこか少し色あせて見えた。

「わあ、すてきな絵！　かわいいひまわりだね！　すっごく上手！」

そんな声が飛んできたとき、彼女は思わず飛び上がった。いまそうになった。いつの間にか、となりのベッドから少女がこちらをのぞきこんでいたのだった。ベッドから転げ落ちそうな彼女に「びっくりさせちゃったかな、ごめんごめん」と言いながら、少女はこちらに身を乗り出す。

「あたし、お花だったら、ひまわりが一番好き！　今度、パパとママに買ってきてもらおうかな」

そうなんだね、とうなずくので精いっぱいだった。少女はじつと彼女のお絵描き帳をながめている。

「あなたのひまわりの絵、大好き。何だか、見てるとあったかい気持ちになる。もっと見せてほしいな」

はずかしさのあまり布団の中に逃げこみたかったけれど、少女の目がどこまでもきらきらして、何だか目をそらすこともできなかった。

それから、彼女がひまわりの絵を描くたびに、少女は楽しそうにこちらをのぞきこんでくるようになった。本当はもっと別の、女の子の絵なんかも描きたかったけれど、ひまわりの絵を描いていると少女がベッドから落っこちそうなくらいにはしゃいで、別の絵を描くと目に見えてしょんぼりするので、そのうち彼女はひまわりの絵ばかりを描くようになった。野原に咲いたひまわり、青空の中のひまわり畑、太陽の下で燃えるように輝いているひまわり……どんなひまわりの絵でも、少女はとても喜んでくれた。

「あなたのひまわりを見てると、やさしい気持ちになるの。何かね、こう……あったかいお日さまの光に照らされてるみたいな気持ち！」

何度も何度も、少女はそんなことを言った。その言葉を聞いたたびに、彼女はうつむいて、ひた

すらお絵描き帳の上で色えんぴつを動かしていた。そんなに自分の絵に自信があるわけではなかったけれど、いつの間にか彼女も、絵の中ののかなひまわりが好きになっていったのだった。

「見て見て！ パパとママがね、ひまわりを持ってきてくれたの！」

ある日、少女はひまわりの鉢植えを彼女に見せてきた。ひまわり畑の背の高いひまわりとは違って、両手に抱えられるくらい小さなひまわりだ。大ききこそ小さかったけれど、窓から差しこんだ日の光を浴びて、一生懸命力強く咲いているように見えた。

昔、どこかで聞いたことがある。鉢植えの花は縁起が悪いから、お見舞いに持つてくるのはよくない、と。鉢植えの花に根っこがあるというのが、病院に根づくという意味にとれるので、お見舞いに渡してはダメらしい。けれども、そんな話なんてどうでもいいと思えるくらい、少女は幸せそうにひまわりの花を指でつついていた。それを見ると、彼女も何だかおだやかな気持ちになつてくるのだった。

歩くのはあまりよくないはずなのに、少女はよくベッドから降りて、ひまわりに水をあげていた。看護師さんに、水をあげてほしいと頼むこともあった。ベッドの上で、少女はしゅちゅうひまわりを抱きかかえて、にこにこ笑っていた。そんな少女を横目に、彼女は変わらぬひまわりの絵を描いた。鉢植えのひまわりと、明るい女の子の絵だった。その絵を少女にあげると、とて

もうれしそうにしていた。

少女はいつも明るく元気いっぱいだった。彼女が少しずつリハビリをはじめ出したころ、少女の方は何やら足の手術を受けていた。相変わらず少女のところにはたくさんの方たちがやって来て、その人だかりの真ん中で、少女は太陽みたいに笑っていた。

やがて、夏も盛りになった。リハビリはどんどん長くつらくなっていって、このごろ彼女は病室に戻ると、ベッドの中ですぐにうつらうつらしてしまう。両親も病院の人も、大事なことだと言ってくれど、やはりつらいものはつらいのだから、布団にくるまったらあつという間に気がぬけてしまうのだった。

「――でね、ムリはしなくて大丈夫だよ」

しばらくとうとしていたところで、そんな声が聞こえてきて、彼女は目を開ける。となりのベッドに目だけ向けると、少女をいつものように数人の子供たちが取り囲んでいた。

「大会に来られないのはざんねんだけど、そのぶん、みんなでがんばるからね。心配しないでね」

「コーチも、チームのことは気にしないで、今は体を大事にして、って言ってたよ」

「そうそう！ だから、こっちは大丈夫だよ。足、早く治るといいね！」

「退院したら、またいっぱい走って、来年の大会にいっしょに出よう！」

子供たちは口々にそんな言葉をかけていた。そういえば、入院する前、少女は足がとつても速くて、陸上の大会にもよく出ていたのを彼女は思い出した。帰り道の坂を風のように走っていく少女の姿、グラウンドを走りぬける姿、それから、ひまわり畑をランドセルを背負ったままかけ回っている姿が、彼女の頭に浮かんた。

「ありがとう！ あたしのぶんまで、大会がんばってね！ 応援してるよ！」

少女は、変わらずにこにこ笑っていた。入院してきたころはこんがり日に焼けていた少女の肌も、今はずいぶんうすい色になっていた。

しばらくすると子供たちは帰っていった。病室の扉がぱたんと閉まったところで、彼女はゆっくりと体を起こした。そして、そのままのベッドに目を移して、まばたきをした。少女がベッドの上で、小さくうつぶいていた。先ほどの元気は、ちっとも感じられない。

窓からオレンジ色の光が差しこんでいた。ぼんやりとうつぶいた少女の顔を、沈みかけた太陽の光が赤色に照らし出していた。いつも元気いっぱいである少女のそんな顔を見たのは、はじめてのことだった。

数秒ほどして、彼女の視線に気づいたのか、少女は顔を上げて、まゆを下げたまま小さく笑った。彼女はどうか反応していいのかわからないままだった。

「あたしね、退院してもしばらくは、陸上やらない方がいいんだって。えへへ、足痛いのにムリして走ってたのがダメだったのかなあ」

少女は布団に包まれた自分の足を見下ろした。

「ちゃんと治っても、また足が痛くなるかもしれない……もしかしたら、もう前みたいには走れないかもしれないの。先生が、こないだそう言ってた」

彼女は、何も言えなかった。おとなしく本を読んだり絵を描いたりするのが好きな自分とは違って、少女は走り回ることが好きな、元気いっぱいな女の子だ。足のケガや病気が持つ意味は、ずっとずっと大きい。

「みんな、来年またいっしょに大会に出ようって言ってくれるけど、ダメかもしれないなあ。あたして、チームのエースなんだって。えへへ、すごいでしょ？ でもさあ、エースが走れなくなっちゃったら、みんな困るし、迷惑するよね。それとも、また別の、あたしよりも足の速い女の子がチームに入ってくるのかな？ そうなったら、あたし、ちよつと困っちゃうなあ……」

日差しがひどくまぶしかった。少女のベッドサイドには、植木鉢がひとつ置いてある。鉢植えの小さなひまわりは、少ししおれてしまっていた。少女はひまわりをゆっくりと抱きかかえて、ぼそっとつぶやいた。

「ひまわりがしおれてきちゃった……水やりが足りなかったのかなあ」

夕日を浴びたひまわりは、赤く燃える太陽みたいだった。

「……退院したら、ひまわり畑を見に行こうよ」

思わず彼女は、そんな言葉を口にしていった。この少女といっしょに、満開のひまわりの中で、夏の空気を吸いたいと思った。ひまわりの中をかけ回る、アゲハチョウみたい少女の姿を、彼女は思い出していた。

「わたし……ひまわり畑で本を読むのが好きだったから……いっしょに、本でも読んでのんびりしよう」

言葉につまりながら、彼女はそう言った。少女はひまわりを抱えたまま、きょとんこちらを見つめていた。何だかはずかしくなってきた、彼女は頭から布団をかぶった。と、少女がふふっと息をもらすのが聞こえた。

「いいね。あたし、ひまわり大好きだから……うん！ 退院したら、見に行こう！ 約束だよ！」

布団から顔を出すと、少女はいつものように太陽みたいな笑顔を浮かべていた。それがとてもうれしくて、彼女ははにかみながら、本を取り出した。両親が新しく持ってきてくれた本だ。女の子二人がお日さまの下を冒険する、そんな物語の読みかけのページには、折りたたんだひまわ

りの絵がしおり代わりにはさんであつた。

夏のある日、彼女は一足先に退院することになった。少女は何度も、「足大事にしてね！ 元気でね！」と手をふり、二言目には「約束だからね！ ひまわり見に行こうね！」と大声で言うのだった。「お友だちになつてみたいでよかつた」と両親が笑うのが、少しだけはずかしかつた。

退院してから、毎日彼女はひまわり畑に向かつた。夏の青空の下、ひまわりは太陽に向かつて咲きほこつていた。入院前のように、彼女はひまわり畑のそばに座つて、静かに本を読んだ。学校が夏休みに入つても、毎日彼女はひまわり畑に通ひ続けた。新しく読みはじめた本は、あつという間に結末をむかえた。

ある雨上がりの午後だった。地面はすっかりぬれていて、いつものように座りながらの読書はできそうになつた。ひまわり畑の前で彼女が立ち尽くしていると、ひまわりに小さな影がひとつ落ちた。ふり返ろうとした彼女の目の前を、アゲハチョウが一匹、ふわふわと横切つていった。「久しぶり！　きれいなひまわりだね！」

そう笑う少女は、真っ白なワンピースを着て、麦わらぼうしをかぶつていた。歯を見せて元気いっぱい笑う少女には、上品なワンピースはとても似合わなかつたけれど、それでも不思議と



どこかしつくりくるものがあつた。

分厚い雲でおおわれていた空からは、太陽と青色とがのぞいていた。日の光が差しこむひまわり畑の中を、二人はゆつくり歩いた。アゲハチョウがひまわりにちよこんととまっているのが見えた。元氣よく歩く少女の黒い髪の毛が、そよそよとゆれていた。

「きれいだねえ」

立ち止まってひまわりを見上げながら、少女は言った。ひまわりからは、さっきまでの雨のしずくがぼたぼたと垂れていた。日の光にきらめくしずくは、太陽からこぼれ落ちた真珠みたいだった。

少女はひまわりに近づいた。少女の背丈と同じくらいのひまわりは、ぬれてつやつぱく見える。そして少女はそのままくちびるをとがらせて、まるで口づけをするように、花びらから伝い落ちていくつゆを飲んだ。

さわやかな風がさあつとひまわり畑をかけぬけた。ずつとうるさかったセミの鳴き声も、今はちっとも耳に入らなかった。ただ彼女は、ひまわりからこぼれたつゆを口を含む少女を見つめていた。長いまつ毛はふせられて、ぶつくりしたくちびるは水分を含んでつやめいている。神話の中の女神さみたいだった。少女は今、太陽のしずくを飲んでいるのだ、と彼女は思った。

「えへへ、お日さまの味がする」

少女はにっと笑って、こちらをふり向いた。そしてくちびるを軽く指でふきながら、「おいしいよ。飲んでみなよ」と彼女に言った。

彼女はおそろおそろひまわりに近づいた。顔のすぐそばにあるひまわりからは、透明なしずくがゆっくりと垂れている。少しためらった後、彼女は思い切って口を突き出した。くちびるをぬらす感触があった。そのままくちびるを開くと、ひまわりのつゆがゆっくりと口の中に広がる。

普通の雨水のはずなのに、透き通った、日の光みたいな味がした。

つゆをぐくんと飲みこんで、彼女が顔を軽くしかめていると、少女がぷつと吹き出した。麦わらぼうしがゆれるくらい、少女はおかしそうに笑っていた。ひとしきり笑った後で、少女は彼女のほっぺをつんつんとつついた。

「ねっ、お日さまの味がしたでしょ？」

きょう一番の、とびっきりの笑顔だった。彼女はくくとうなずいて、そのままそわそわとスカートのすそをつかんだ。少女は今までと同じように元気いっぱいだったけれど、そのぬれたくちびるを見るとさっきのあの女神さまみたいな横顔を思い出してしまって、彼女は何だか少しだけどきどきしてくるのだった。口の中には、まだ太陽のしずくの味が残っていた。

それから二人はひまわり畑の中を歩き回った。お日さまの光がどんどん強くなっていて、地面もすっかり乾いたころ、彼女はひまわりのそばに座って、本を開いた。「それ、何の本？」と興味津々そうにこちらをのぞいてくる少女に、彼女ははじめの章をゆくり読んで聞かせた。

朝は雨だったなんて信じられないほどおだやかな午後の空を、白い雲がゆくりと流れていく。風が心地よかった。日陰に身を寄せ合った二人は、物語の世界に吸いこまれていた。

「すっごくおもしろかった！ 続きが気になる！ ねえねえ、もしよかったら、その本貸してくれる？」

「いいよ。もう読み終わってるから」

彼女が本を差し出すと、少女は飛び上がって喜んだ。あんまり勢いよく飛びはねるものだから、思わず「足に悪いよ」と言いたくなったが、それより早く少女はこちらに向き直った。

「そっかあ。ひまわり畑を走り回れないなら、代わりにひまわりのとなりで本を読めばいいんだ」  
少しだけしみじみとした口調だった。入院中に一度だけ少女が見せた、さみしそうな横顔を思い出して、彼女は目を細めた。少女はすぐにまたいつもの元気いっぱいな顔になって、「本読むね！ あ、大丈夫だよ、ちゃんと返すから！」と言った。当たり前前のことを力強く宣言する少女に、彼女は吹き出すしかなかった。ひまわりの群れは、いつまでもゆらゆらとゆれ続けていた。

夏休みが終わって学校がはじまると、二人はまた入院前の関係に戻った。会って話すこともなくなり、それぞれの生活を送るようになった。少女は走り回りはしなかったけれど、たくさんの友だちを引き連れて学校中を遊び回っていて、彼女は教室のすみでお絵描きや読書をしていた。元々、正反対の性格だったし、クラスも違うのだから、距離が生まれるのも当然のことだった。

少女が別の街に引っ越すらしいとの話を聞いたのは、秋も深まってきたころだった。もつと大きな足の手術をするために、大病院の近くに引っ越すそうだった。そんなクラスメイトの話を聞き流しながら、彼女は自由帳にひまわりの絵を描いていた。

彼女が少女と再び話をしたのは、少女が引っ越す前日だった。帰り道のひまわり畑の前で、ランドセル姿の少女が立っていた。彼女を見るなり、少女はこちらに近づいてきた。どうやら彼女を待っていたらしかった。

「ごめんごめん、返すの忘れかけてて、遅くなっちゃった」

そう言って、少女は本を彼女に差し出した。

「すっごくおもしろかったよ！ あたし、本読むの得意じゃなかったけど、読書って楽しいんだなって思った！ 今度の入院のときには、本いっぱい読むようにするね！」

本をじっと見つめたまま、彼女は「うん」とうなずいた。見るからにそそっかしそうな少女が

長らく持っていたにしては、本は貸したときと変わらずきれいだった。

「ひまわりの絵、大事にするね」

そんな言葉に彼女がはっと顔を上げたときには、少女はもう「じゃあね、ばいばい！」と手をふって歩き出していた。彼女もつられるように手をふった。少女の背中はどうどん小さくなっていて、あつという間に見えなくなった。彼女はなおも手をふり続けていた。夕日の中、枯れうなだれたひまわりが、いつまでもゆらゆらとゆれていた。

それから十年以上が経ち、デザイナーとして働くようになった今でも、夏になるたび、彼女はついひまわりを目で探してしまう。都会のすみっこにある、冷房のきいたマンションの部屋の中をいくら見回しても、ひまわりが見つかるわけではないのだが、ふと手を止めた瞬間に、あの夏のふるさとのひまわり畑が目の前に広がるような気がするのだ。

少女とは、あれから一度も会っていない。中学に上がったころ、足がだいぶよくなってきた、また陸上をがんばっているらしいと風のうわさで聞いたくらいだった。結局再会もできないまま、彼女は都会に出て、細々とデザイナーとして働いている。

きょうも彼女は、依頼された表紙のデザイン案をタブレットで丁寧に描いていく。エレガントなチョウをモチーフにしたデザインだ。ずっと集中していたからか、少しまぶたが重い。しばらくペンを動かしたところで、いったん作業を中断して、彼女は机にふせた。

目を閉じると、ひまわりのつゆを飲んだ少女の横顔が浮かび上がった。女神さまみたいなとてもきれいな横顔は、今でも彼女の頭の中に焼きついている。何年経っても、少女の横顔が、あの太陽のしずくの味が忘れられない。きっと、この先もずっとそうなのだと思う。

軽く仮眠をとったところで、彼女は再び仕事にとりかかった。デザイン案をひとつ描き終えたところで、新しい依頼が来ていることに気づく。とある小説の表紙のデザインを描いてもらいたい、というよくある依頼だった。

ぼんやりと依頼文を目で追っていた彼女は、小説の作者名のところで、はっと息を止めた。そこに記されていた作者の名前を、彼女は知っていた。

思わず指先がふるえていた。メールの返信をするだけなのに、ひどく時間がかかってしまった。ひまわりの中、楽しそうに笑う少女の姿が、まぶたの裏に焼きついていた。

事前に送ってもらった小説を、彼女はあつという間に読み終えた。走るのが好きな女の子が、足の病気を乗り越えて、友だちといっしょにひまわり畑を散歩する、そんな話だった。

数日後、彼女は作家あてに手紙を書いた。いつもは手紙なんて書かないのだけれど、今回はメールよりも手紙の方がいいと思った。

しばらくして、手紙の返事が来た。便せんには小袋がひとつ添えてあった。彼女はそつと小袋を開けた。中には、ひまわりの種が入っていた。

植木鉢を買って種をまくと、五日ほどして芽が出た。仕事でタブレットに向き合うかたわら、彼女はこまめに植木鉢に水をやった。家でもできる仕事なのが助かった。芽はそのうち葉となり、ゆつくりと大きくなっていった。

やがて夏になったころ、小さなひまわりの花が咲いた。ちょうど同じ時期に、小説の発売日をもかえた。発売日、彼女は本屋に行って小説を買った。

カーテンのすき間から、夏の日差しが差しこんでいる。のんびりと小説を読んでいた彼女は顔を上げて、そつと植木鉢のひまわりの花びらに軽く指を添えた。ひまわりはきょうも元気に咲いている。それは、世界で一番きれいなひまわりだった。





テーマ作品

沈黙



# 送り花火

黒田ももん

一度、父と花火を見に行ったことがあった。

車で二十分ほどの距離だった。花火大会をやるとの広告を目にした私がねだったのだった。母はその日、親戚の法要で留守にしていた、たまたま父は仕事が休みだった。頼れる大人は、必然的に父だけだった。

今思い返してみても、なぜ父が引率役を引き受けたのかわからない。そうなる過程については、私も思い出せない。ただ、覚えているのは、暗がりの中を車から降りて、人のごった返す河川敷を父とともに道端の木陰から見下ろしていたことだった。

河岸は無数の黒い頭で埋め尽くされていた。無数の声が私の足を震わせた。私は生まれて初めて、大群衆というものを知った。自分と家族の他に、これだけ多くの人間が存在していたことが、にわかには信じられなかった。まだ、就学前のことだった。

煙のにおいが辺りに漂っていた。花火によるものではない。父の煙草だった。父は煙草を啜え、無言で河川敷を見下ろしていた。

人々のざわめきに私は足がすくんでいた。花火を見たいという子供らしい好奇心は、とつくに消え失せていた。何人もの立ち見客が私たちの前に立ち止まり、夜空の半分ほどはその者たちの頭で遮られていた。

もうすぐ花火が始まる時間になっていた。父は煙草をくゆらせながら、さっさと行ってこいというように顎をしゃくった。暗がりの中、紫煙がゆらゆら立ち上っている。一緒に河川敷まで下りてくれるような殊勝な父ではなかった。

もう帰りたいとも言い出せなかった。棒切れのような足を動かして、私は河川敷に向かって歩き出した。河岸へと下りていくと、人間の密度は一気に上昇する。じきに打ち上げられる花火の方に注意を向けた人々は、一人ふらついている男児に道を譲ることなどさらさら頭になく、私は人間という人間の合間を縫って歩くしかなかった。中年ほどの男に押され、若い女に目の前を遮られ、老翁に肘をぶつけられる。私は涙をこらえながら、花火の見える位置を探すしかなかった。なぜこんな目に遭わねばならないのか、心底理解ができなかった。

大群衆と大音響の中、私が何とか河岸の端に辿り着いたときだった。夜空を煙のような一筋の光が上っていくのが見えた。その形状が、潤んだ私の目を捉えた。

天に向かう、一直線の、鋭い光だった。

それから数秒ほど遅れて、花火が空に打ち上がる。四方八方から飛んでくる人間たちの轟にも似た歓声が、私の体を震わせた。赤と緑の光が濃紺の空に散らばっていく。

花火が左右非対称なことを、そのとき初めて私は知った。

四つか五つ、花火が宙に踊ったのを眺めてから、私は踵を返した。とつくに気分が悪くなっていたのだった。難儀しながらようやく元の場所に戻ると、相変わらず父は煙を吐き出していた。私が戻ってきてても、眉一つ動かさない。

花火は幽霊だ、と私は言った。ひどく拙い口調だった。私の脳内に残っていたのは、大輪の花火よりも、それが破裂する前にひゅうと打ち上がっていった、煙のような尾の方だった。

煙草の香りが夜の澄んだ空気と混ざり合っていた。父は無言で視線を空に向ける。

夜空には花火が次々と打ち上がっていた。

親子らしい記憶は、思えばそのときくらいのものであった。

私は、父を憎んでいたのかもしれない。

中学のころに死んだ父とは、会話らしい会話をした記憶などなかった。

父は仕事で家を空けているのが常だった。家にいたところで、どうというわけでもなかった。家のことなど一切興味がなかった。

指先を赤くして家事に励んでいた母は、きつと父に苦勞させられてきたのだろう。自分のこと

は後回しにし、常に忙しく働き回っていた。私は自然と母にばかり懐いた。

父は朝から晩まで仕事で、家族と顔を合わせない日すら多々あった。顔を合わせても、私は何を話したらいいのかわからなかった。話題を探すのも億劫だった。父も何も言わず、ただ無言のまま煙草をくゆらせているだけだった。

父がいる日は室内に煙のにおいが充満していた。父の家具には煙草臭が染みついている、私は近寄ることすらしなかった。ふんぞり返って煙草を吸っている父を脇目に、せっせと働いていた母は時折咳込んでいた。母は体が強い方ではなかった。父はそれを見て何をすることもなく、ひたすら煙を吐き出していた。

私にはそれが気に食わなかった。無言で煙草を吸うだけの父は、薄汚れた銅像のように見えた。私は煙のにおいが嫌いになった。

母さんのことを考えたらどうだ、と私が吐き捨てたのは、十も過ぎたころだったか。父はやはり何も言わなかった。その態度が気に入らなくて、私はじっと父を睨みつけていた。翌日から、父は家では煙草を吸わなくなった。けれども、常に煙のにおいを体にまもっていたのは変わらず、父が家に足を踏み入れた瞬間、聖域が汚されるような心持すら抱いた。

私はますます煙のにおいが嫌いになった。無理からぬことだと今でも思っている。

中学に上がったころ、父は急逝した。

肺を蝕まれていたようだった。夜中に倒れて、それきりだった。実に呆気ない最期だった。

葬式で、私は涙の一つも出なかった。どんな顔をすればいいのかもわからなかった。清々した、とうわごとのようにつぶやいていた。

よく晴れた日だった。火葬された父は、煙となって空に上っていった。青い空に煙がたなびいていくのを、私はじっと見つめていた。

参列客も含めて、泣いているのは母だけだった。あんなに父に苦勞させられていたはずの母は、しきりに手巾を顔に押し当てていた。

それが私にはどうしても理解できなかった。

それから何年か母と二人で支え合って暮らしていたが、進学を機に私は家を出た。定期的に実家に顔を出してはいたものの、数年前に所帯を持ったこともあって、近ごろは帰省することめっきり減ってきていた。

けれども、父の二十三回忌があるというので、この夏、私は息子を連れて一年ぶりに実家へと



戻ってきていた。古びた実家は相変わらずもので溢れていた。母は未だに父の遺品を整理しきれないのだった。家には興味がないようだったくせして、父の所有物はそれなりの量を占めていた。

父の安楽椅子を目にした息子は、真っ先にそれに飛びついていったが、私としては顔をしかめるしかなかった。けれども、触るな、と言うものも憚られて、黙りこくって床に座り込んだ。家具からは、さすがに煙のにおいは消えつつあった。

椅子、机、父のために用意されていた雑多な品の数々が、私の神経をひりつかせた。こんなもの、さっさと捨ててしまえばいい、と私は母に言った。そう言ったのは、今日が初めてではない。実際、それらは使われなくせに場所だけ取るようになっていた。押し入れに詰め込みきれず、こうして居間に置きっぱなしになっているくらいだった。

母は困ったような笑顔でかぶりを振った。捨てられない、捨ててしまえばいいとは思うのだけど、と言った。棚の上には、古い写真が立ててあった。若いころの父の写真だった。理解ができない、と私は思った。苦虫を噛み潰したような心持になっていた。

法要自体は、ごくあっさりとして過ぎていった。久々に会った親戚らに挨拶をすると、彼らは口々に、大きくなったものだ、と私に言った。そう言われるのにも飽きていた。もう子供がいる身の

私だが、年老いた彼らには、いつまでも幼いころの姿が焼き付いているのかもしれない。実際、そんな私の方も、久々に会った親類の子が知らぬ間に成長しているのに目を丸くすることも増えてきたから、人のことはとやかく言えないものだった。

法要に集まったのは、伯父など幾人かの親類だけだった。もう二十三回忌にもなるのだから、わざわざ親類を呼ぶ必要はないと私は母に言ったが、呼ばなくても彼らは勝手に集まってくるのことだった。伯父らはさほど父の思い出話はず、単なる世間話で盛り上がっていた。故人を偲ぶよりも、ただ集まる機会を欲しているだけなのかもしれない。

葬儀の際も、それは変わらなかった。父の話はそこそこに、親戚らは酒を飲んで談笑していた。父の友人知人もほとんど参列していなかった。父の死を悲しむ者よりも、残された私と母を心配する者ばかりだった。泣いているのは、母だけだった。

結局、父の人生とは何だったのだろうか、と思う。父の笑った顔すら、私は見たことがない。煙草を吸ってただ椅子にふんぞり返っていただけの姿を思い浮かべ、妥当な扱いだ、と私は自分に言い聞かせていた。

会食も終わりのころ、親類の一人が私を見て、それにしても大きくなったものだ、と言った。今日だけでも数回目になる、その聞き慣れた言葉に愛想笑いをしながら、私は退屈そうな息

子を抱きかかえていた。

あいつもそんな風によくお前を抱いていた、と親類は私と息子を眺めて笑った。私は一瞬動きを止めたが、すぐに取り繕うように、はあ、と口に出した。あの無愛想なやつがと意外に思ったものだ、そう酒に酔った親類は続けた。私は何も言わなかった。そんなことは、知りもしなかったし、知りたいとも思わなかった。黙りこくっている私を、息子が不思議そうな顔で見上げていた。私はやはり何も言えないままだった。

親戚が帰ったところで、私は父の部屋に足を踏み入れた。母が掃除を欠かさないらしく、主人のいない部屋は小綺麗に保たれていた。家具は相変わらず昔のままだった。父の死から時が止まっているかのような錯覚は、経年劣化の進んだ家具の端々によってかき消された。

さっさと売るなり捨てるなりしてしまえばいい。いつまでも父がいたころの状態のまま残していることに、何の意味もない。私は家を出ているのだし、老いた母がただ一人で暮らすだけだ。使用者のいない部屋など、とつとと物置にでもしてしまった方が有意義だろう。

色あせた机の上には、灰皿が置かれていた。もう新たな吸い殻が供給されることはないというのに、かつては黒く薄汚れていたそれは、綺麗に磨かれていた。私は袋を取り出した。こんなもの、さっさと捨ててしまいたかった。だが、美しい光沢を放つ灰皿が、私の目をとらえて離さな

かった。記憶の中のそれは、こんなにも美しくはなかった。

私は灰皿を手にとった。ひどく重かった。体の芯にまで響く重みだった。

くだらない昔話を、私はぼんやりと思い出していた。

父と花火を見に行った翌年もまた花火が上がった。

花火の日、母は体調を崩して、家で寝ていた。父は仕事だった。

ひどく手持ち無沙汰だった。私は父の部屋に上がり込んだ。大きな安楽椅子の上で、父の灰皿に指を突っ込み、吸い殻と灰をぐるぐるかき混ぜていた。灰皿には煙草の小さな山ができていた。九時を少し過ぎたころだった。父はまだ帰ってこなかった。

私は吸い殻をかき混ぜ続けた。吸い殻はどんどん歪んで潰れていった。汚いとも思わぬまま、私は落ち着かない胸の内を落ち着けるように、指先を動かしていた。

鈍い音が断続的に部屋を震わせていた。窓からは、山の合間にせいぜい花火の端がちらと見える程度だった。

相変わらず、父は帰ってこなかった。

私はひたすらに、灰皿を指でかき混ぜていた。指が黒く汚れるのも気にならなかった。ただだ、円を描くように灰皿の底に指を押し付けていた。

その日一番に花火の音が響き渡ったころ、父はようやく帰ってきた。

食事をするでも、風呂に入るでもなく、父は真っ先に私のいる自室に入ってきた。

灰皿を弄んでいた私にちらと目を向けたものの、父は何も言わず、柵から取り出した蚊取り線香に火をつけた。

室内に、煙のにおいが満ち始めた。蒸し暑い夜だった。

私は灰皿を机の上に戻した。爪の間まで、すっかり灰で汚れていた。母が元気だったら、きっとひどく叱られていたことだろう。

そうして私はまじまじと父を見つめた。父の首筋には、汗が一筋流れていた。無骨な喉仏がいやにぎらぎらと輝いて見えた。

父は相変わらず無言のまま、蚊取り線香の煙を軽くうちわであおぐと、窓を開けた。

花火はもう終わっていた。窓の外には闇が広がっていた。山々の輪郭がうつすらと視認できる程度だった。

父は何も言わなかった。私も何も言わなかった。

沈黙の中、蚊取り線香の煙だけが静かに上っていった。

手に取った灰皿をそのまま袋に投げ入れようとして、私は動きを止めた。

もう喫煙者はいないのだから、さっさと捨てるなり売り飛ばすなりしてしまえばいいものの、かつて灰皿の中をかき混ぜていた指先の感触を思い出して、くすぐったいような思いがした。

そうやって私が灰皿と袋を手に行っていると、不意に裾を引く者があった。先ほどまで母と遊んでいたはずの息子だった。息子はじいところらを見上げていて、私は慌てて取り繕うように頬を緩めた。息子のまっすぐな目が私を射貫いた。

花火が見たい、と息子は言った。ひどく幼い口調だった。

私は灰皿を机に戻した。そういえば、花火大会の開催を告げる広告が、郵便受けに放り込まれていた。例年、花火が上がるのはこの時期だった。

もうすぐ日も暮れようとしていた。

車を二十分ほど飛ばすと、河川敷に到着する。毎年毎年懲りもせず上がる花火に、飽きもせず人々が群がっていた。

夜空にはいくつもの花火が打ち上がっていた。赤、緑、青、多彩な色が、暗く沈んだ夜を鮮やかに演出している。重低音が私の体にまで響いてくる。

花火を見るのは、思えばあの日以来のことだった。

私はじいと花火を眺めていた。相変わらず、河川敷は煙臭く、人々のざわめきが波のように揺れる。甲高い歓声が耳に突き刺さる。光と音の洪水が私の周囲を包んでいる。二十年以上の月日の間に、花火はより多彩になっていた。

けれども、私の目に真っ先に映っていたのは、色鮮やかな花火の真下から上る、白い紐のような尾だった。わずかにうねりながら宙を上っていくそれは、私の脳に強烈な線状の光の像を残す。ああ、やはり煙に似ている、と思った。

息子は私の裾をぎゅっと掴んだまま、目を大きく見開いて、人々の向こうに大輪を咲かせる花火の群生を眺めていた。その幼い目が何を映し出しているのか、私には知りえない。けれども、暗がりに沈んだその頬は、かすかに紅潮しているように見えた。

無数の花火の洪水が空を埋め尽くす。おびただしいほどの声が河川敷から立ち込めてくる。私

ら親子は無言だった。歓声一つすら上げなかった。ただ、まじまじと花火を眺めていた。閃光が魚群のように夜空に散らばっていく。花火は、当然のように美しかった。

いつかの、煙草をくゆらせながら空を眺めていた父の横顔を、私は思い出していた。

数十分ほどしてもなお、花火は上がり続けていた。途中退場する人々が河川敷から上がり、劇場帰りの客のような足取りで、談笑しながら夜道を歩いていく。我々も帰ろう、と私は思った。あまり遅くなると、母が心配する。息子もまだ幼い。帰ろうか、と私は息子に言った。

息子はじつとその場に立ち尽くしていた。相変わらず丸々とした瞳は、花火を今なおとらえていた。その名残惜しさを断ち切るように、私は軽く息子の手を引いた。息子はゆっくりと私を見上げた。頬を膨らませて、興奮を隠しきれないでいるその顔に、私ははっと息をのむような思いがした。

目を輝かせながら、花火は生き物なんだね、と息子は言った。

私は少しの間目を丸くしていたが、やがて苦笑するように顔を歪めた。

きつと幼時の私にも、花火は化け物のように映っていたのだろう。幼い少年の目に映っていたのは、鮮やかな花火の方ではなく、花火の尾の鮮烈な光だった。

すうと息を吸った。不思議と、煙草の香りが肺に充満したような気がした。帰ろう、と私は息



子の手を引いた。

振り返れば、花火が煙のような尾を引いて、夜空を上っていくのが見えた。



# プロット交換小説



# 春眠に風ぐ

原作 作花霖

本文 黒田ももん

僕とハルキくんは小学五年生の頃から一緒だ。

いつも明るくて前向きで、でも少しだけお寝坊さんの、自慢の友達のハルキくん。これから話すのは、そんな彼と僕との物語だ。

## 1

瀬戸内海の夏は、からっと晴れた日が多い。

先生が「もうすぐ夏休みですが」と進路相談会の説明をしている。けれど、その内容もろくに頭に入らないまま、風は机の上の通学鞆にぶら下がったかわいらしい怪獣のマスコットを眺めていた。扇風機の音がどこか遠くに聞こえる。風は「彼」に脳内で話しかける。

(ねえ、ハルキくん)

『なあに？ ナギくん』

いつも「彼」は風の話に答えてくれる。そして、その声は風にしか聞こえない。

(僕、大人になりたくないよ)

『そうなの？ どうして？』

(……何でなんだろうね)

『大丈夫だよ、ナギくんならきつと』

(そうかなあ)

彼と話すときは、どうしても小学生みたいな口調になってしまう。いつも明るく穏やかな彼が、風の沈んだ心をも包み込んでくれるからだろうか。

風の鞆についた、怪獣のマスコット。それがハルキくんだ。頭の中でいつも相談相手になってくれる、風の大切な秘密の友達だ。

風は窓の外に目をやる。雲は穏やかに青空を流れていて、時間がこのまま過ぎなければいいのにと考えた。高校卒業を何かのタイムリミットのように感じて、彼はわけもなく焦っていた。

真夏の快晴はじりじりと音がしそうなぐらい眩しいのに、空調のきいた教室は外の景色から隔てられていて、まるで別世界のように思える。

(あんなに青いと海みたいだな)

あの空を魚が泳いでいたら……雲の珊瑚礁に美しい小魚たちが群がって、くじらやサメは悠々と太陽を遮っていくだろう。魚たちは雲のような白かもしれないし、光を透かす半透明かもしれないし、あるいは虹色に輝いているかもしれない。

そんな夢想をしているうちに、ホームルームが終わっていたようだった。友人たちが帰ろうぜ

と声をかけてくる。凧は我に帰って、慌てて席を立った。

教室には無数のざわめきが交差している。その真ん中に彼は立っているはずなのに、なぜだか自分だけが取り残されているように思えた。

## 2

車窓の外には一面海が広がっている。水面が昼下がりの太陽を反射してきらきら光るのを、きれいなあと凧はぼんやり思っていた。

「小瀬川？」

隣の周防の声に、凧ははっと我に帰った。クラスメイトのこの少年とは、帰りの電車が同じだった。

「ごめん、ぼーっとしてた」

「お前そういうの多いよな」

しょうがないなあという凧に眉を下げて、周防は人好きのする笑顔を見せた。

「今日、進路相談会？　の話があったじゃん？　何か進路決めてる？」

「え……っと」



「俺はさ、実家を継ごうと思ってんだ。だから、大学には行かねえ」

周防の親は漁師をやっていた。世間話のように碎けた口調で話す彼の目には、しかし、確かな光がこもっていた。

「小瀬川はどうすんの？ つつても、お前は頭いいし進学だよな」

気のいい笑顔を見せる周防に、風は曖昧にうなずくしかなかった。

「そう、なんのかな。全然大学に行ってる自分のイメージがつかないけど」

「うーん、お前文系だよな。法律関係は興味ないの？」

「無理だよ。争うのとか苦手だし」

「ま、お前はそうだよな。よく本読んでるし、文学部とかは？」

「興味はあるけど、親はそれより経営とか勉強してほしいって……」

言い終わるより早く、車内アナウンスが鳴り響いた。風の降りる駅だ。彼は周防に手を振って、そのまま電車を降りた。このまま十五分ほど歩けば、彼の家だ。

けれども、何となくまっすぐ家に帰りたくなかった。気付けば、駅前の商業施設に吸い込まれていた。自然と足は書店へと向かう。店頭には、『やさしいかいじゅうくん』という絵本シリーズの新作が、平積みになされていた。

そこからふっと目を逸らして、本屋の奥の棚に目をやると、受験生向けの過去問題集コーナーに「高三生必見！ この夏が勝敗を分ける！」というポップがついていた。

問題集を手にとることはしなかった。彼は脳内でつぶやく。

(……最後の夏だよ、ハルキくん)

『そうだね、ナギくん』

(あと半年で卒業だよ?)

『そしたらナギくんも大学生だ』

大学生。その言葉が、妙なちぐはぐさを持って風の脳内にこだまする。高校三年生の夏。進学を考えるなら、猛勉強に励む時期だ。同じ塾の生徒たちの中には、名門校への進学を目指して、一、二年生のうちから受験勉強をしている者も多い。

『ナギくんはどんな大学生になるんだろうなあ』

いつも風には笑顔と心の安らぎをくれるハルキくんの楽しそうな声が、今日はなぜだか心にずんと重く響いた。

「……帰ろう」

重い足取りで施設を出ると、蟬の声が頭の奥の方にまでうるさく響いて痛かった。入道雲がや

けに高く感じられて、彼は大きくため息をついた。

3

その翌日は、終業日だった。

塾に行かなければならないのにどうもその気になれず、風は防波堤に座ってぼんやり海を眺めていた。周防には用事があると嘘をついて、先に帰してしまっていた。

「おーい坊主、こんな天気の日になんとかここにいたら危ねえぞ」

知らない中年の男に声をかけられて我に帰る。少しだけのつもりだったのに、何時間もそこにいたようで、気付いたら日が落ちかけていた。晴れの日ならきつと日差しで耐えられなかっただろうが、その日は曇りで辺りは薄暗く、風が強く吹き付けていた。

「はい、すみません」

力なく答えるだけ答えたけれど、その場から動く気力はなかった。ため息を落として水面を眺める。昨日より長いため息だった。

「このままどこかに行っちゃいたいな」

口に出して、そう彼はつぶやいていた。

「ねえ、二人でどつか逃げようよ。ハルキくん」

『どこかって、どこ？』

「わからないけど、簡単には帰れないところ」

海の向こうの国とか。そうつぶやいてみれば、空想の国での出来事が、まるで現実の記憶のようになり立ち上ってきた。

「海の向こうに行ったらさ、言葉が通じないから、最初の頃は身振り手振りで何とかコミュニケーション取らないとな。でもハルキくんはそういうの得意だね。僕は苦手だけどさ……」

言葉はとどまることを知らず、次々と溢れていく。

「頑張っって向こうの言葉を覚えたら、紙芝居を作ってさ、道端とかで知らない人に披露しよう。

異国ならそういうこともやっちゃえる気がするし。誰かが足を止めてくれたら、嬉しいよな」

ハルキくんは、じっと黙って彼の話を聞いているようだった。

「二人でさ、いろいろ考えよう。どんな話だったら面白いかな。例えばこんなのは？ 七つの海

を渡った、海賊の話。その海賊は人間離れした力を持っていて、皆に尊敬されていたけど、実は

巨大怪獣の末裔で——」

口に出してみたところで、あまりのくだらなさに自分で失笑してしまう。実に馬鹿馬鹿しい御

伽話だと思った。

「ま、こんなんじや三文小説にもならないか」

『……ナギくん』

「ねえ、ハルキくん」

水面がわずかに揺れる。曇りで風の強い今日、夕風は期待できそうにない。

「いつになったら戻ってくるの？」

声が震えていた。ハルキくんは何も言わない。彼は、ただただ黙り込んでいる。

暗く、底の见えない海の中から、風の泣き出しそうな目がじっと風を見つめている。

「……僕、もう待てないよ」

「会いたいよ……春木くん」

4

——春木くんと僕が出会ったのは小学五年生のときだった。

作文にすれば、きっとそんな一文から始まるに違いない。

五年生の春、父の仕事の都合で、凧は現在住んでいる海辺の町に転校してきた。

両親は、息子の新しい人間関係に希望を抱いていたようだったが、彼はとても楽観的ではいられなかった。五年間でほとんど決まり切っているであろう強固な人間関係の輪に、途中から入っていくはずもない。不安に押しつぶされそうになりながら、とぼとぼ通学路を歩いていた凧に、最初に声をかけてくれたのが春木だった。

「これ、キミの？ 落としてるよ！」

転校を不安がる凧のために母が持たせてくれた手作りのお守りの紐がほどけて、地面に落ちてしまっていた。それを拾ってくれた一人の少年が、春木蒼だった。

「あ、ありがとう」

「このお守りのししゅう、もしかして『やさしいかいじゅうくん』？」

「えっ、あ、そ、そう……だよ」

凧を安心させようと、母がお守りに縫い付けてくれていたのだった。凧が昔から大好きだった『やさしいかいじゅうくん』は、その頃には既に絵本からテレビアニメなど幅広く展開していた。人気作品だが、しかし、小学五年生の男の子が持つには若干可愛すぎた。前の学校では、「女子みてーだな！」とからかわれたこともあった。

おずおずと答えた風は、春木は子犬のように目をらんらんと輝かせる。

「やっぱり！ これ、ボクも好きなんだ。同じ人、学校で会ったことなかったから嬉しいよ！」

「えっ」

「キミ、何年生？」

「あ、ご、五年生……」

「え？ ボクと同級生じゃん！ あれ、でも、見たことない顔だけど？」

「て、転校してきたんだ。今日、はじめてで」

「ええー！ じゃあ、奇跡的に学校で一番初めに転校生に話しかけたってこと？ それって超ミラクルじゃん！」

朗らかな毒気のない笑顔だった。春木の無邪気な様子に、緊張していた風も肩の力が少し抜けた。

その場で自己紹介をし合って、春木は「ナギくんのこの学校での友達第一号」を名乗り出た。学校に馴染めるかという不安も吹き飛んで、もう友達ができた！ と風は内心で大喜びしていた。

それから二人はあつという間に仲良くなって、誰もが認める親友になった。放課後に駄菓子屋

に行つて少ないお小遣いから買えるお菓子を吟味したり、暑い日は図書室に行つて『やさしいかいじゅうくん』の絵本を読んだり、防波堤に座つて海を眺めながら二人でいろんな空想の話をしたり。風オリジナルの絵本だつて、春木は喜んで読んでくれた。六年生では一緒に図書委員をして、全校集会でオリジナルの紙芝居を披露したこともあつた（春木のオーバーな演技が結構ウケたものだ）。

何事もポジティブに考える明るい春木は、風とは正反対だつた。けれど似ているところもあつた。色々空想して楽しむのが好きなのところとか、ちよつと抜けてるところとか、身長が低いところとか。ちよこまかと元気に動き回る春木と、いつも縮こまつてじつとしてゐる風は、「タイプの違う二匹の小動物みたい」とよく周りの大人から笑われていた。

中学生になつても二人は仲良しで、放課後の遊びも勉強も一緒だつた。春木は風のことを名前と呼んでいたけれど、風は相変わらず春木のことを苗字で呼んでいた。そんな少しだけちぐはぐな、けれども穏やかな午後の海のように心地よい関係だつた。

手に取る本の文字が小さく多くなつて、絵のないものになつてからも、『やさしいかいじゅうくん』シリーズだけは二人で新作を追いかけて続けた。劇場版が決まったときは二人で喜んで



し、飛ぶように見に行った。劇場版のストーリーは、かいじゅうくんが遠くの国を見るために陸地を飛び出して海を渡るというもので、海に親しみのある二人は大層興奮したものだ。

「俺たちもさ、海、渡りたいね」

中学に上がり、一人称が「俺」になった春木は、あの頃と同じように目を爛々と輝かせて言った。風はうーんと唸る。

「大人になれば渡れるかな……?」

「きつと行けるって! 一緒に世界中の海を見に行こう」

「何それ。何か海賊にでもなるみたい」

「海賊! いいじゃんそれ、海賊なろっか、俺たち。ま、そっちは風っていう名前だし、全っ然似合わないけどさ!」

冗談なのか真面目なのかわからない春木に、思わず風は吹き出してしまった。

「何言ってるの、春木くん!」

「えゝ、駄目?」

そんなとりとめもない会話を交わす時間が、風には何よりも楽しかった。

成績は風の方がほんの少し上だったが、似たり寄ったりだったので二人は同じ高校を目指していた。同じ高校に行って、高校生男子らしく馬鹿なこともやって、たまには『やさしいかいじゅうくん』の話をして、そうやってティーンエイジャーの終わりを楽しんでいく。そんなつもりだった。

風はこれからもずっと、自分と春木は一緒にいるものだと思っていた。

そう、いつも通りの帰り道、春木が突然意識を失って倒れるまでは。

「春木くん!!」

顔面蒼白で救急車を呼んだ。病院に搬送された春木はしばらく色んな病院をたらい回しにされて、正式な診断が下るまでに一ヶ月以上かかった。その一週間は風にとって嵐のように一瞬であり、永遠のように長い時間でもあった。

春木に下された診断結果は、過眠症。ただ医者の見解では、これはあくまで既存の症例に当てはめて近い病名で呼んでいるだけで、春木の症状はもっと深刻な「病名のない病」であるらしい。つまり、世界的にも類を見ない難病かもしれない、とのことだった。

毎日眠っている時間が少しずつ長くなり、やがて眠りっぱなしになる。パーキンソン病にも似

ているようだが、春木の症状はもっとシンプルで、「人間が通常七、八時間必要とするのと全く同様の睡眠を、ただ人の二倍も三倍も必要とするように体が作り替えられてしまう」とのことだった。原因は調べても調べてもわからず、春木自身ストレスの原因となるようなことに全く心当たりがなかったので、医者も匙を投げてしまったらしい。

「最悪、二度と目が覚めないかもしれません」

大切な友人だから、どうか症状について教えてほしい。そう医者を引き止めた風は、主治医の淡々とした説明に、目の前が真っ暗になった。

（何か、僕にできることは……）

毎日毎日、見舞いの時間や授業中、寝る前に、風はそんなことを考えた。焦りと恐怖とで、寝付けない日々が続いていた。

春木は案外呑気なもので、「来年もかいじゅうくんの映画やるなら、見に行けないの残念だなー」などと口を尖らせていた。彼のそんな言葉を聞くたびに、かいじゅうくんの話で盛り上がったいたかつての日々が脳裏をよぎり、風の胸の奥がちくちくした。

春木の入院からしばらく経ったある日、風は病室の椅子に腰掛けたまま、彼に言った。

「僕、医学部目指す。お医者さんになって春木くんの病氣治すよ」

「えー、しなくていいよそんなこと。俺のことでナギくんの将来決めて欲しくない」

春木は一瞬目を丸くしたが、すぐに苦笑いしながら手を横に振った。その手は、入院前よりも確かに細く、青白くなっていた。入院前、元気で朗らかな春木は、もっと健康的な肌をしていた。凧とは違って、彼はスポーツもそこそこ得意だったのだ。

「春木くんのことじゃなくて、僕の問題でもあるよ。春木くんにもう会えなくなったら困る。だから、これは僕のためだよ」

「だから、いいって。ナギくんにはナギくんの進路があるんだし、一生に関わることじゃない。俺のことなんて考えなくて、自分らしい選択をしろよ」

「僕らしい進路が、医学部に行くことなんだ」

「いや、そうじゃないだろ。第一、俺が入院するまで、医者になりたいとか全く言わなかったじゃん。俺がこんなになったから、それに引っ張られてるんだよ」

「違う！」

「俺のことを心配してくれるのは、そりゃありがたいけどさ、それでナギくんの将来を歪めるとか、俺は嫌なんだよ」

だんだん、お互いに口調が荒くなっていった。その日、凧は人生で初めて春木と口論になった。

それから、数十分ほど水掛け論のような言い合いをした後、春木は今まで見たことのないくらい真剣な顔で言った。

「絶対に俺の影響で進路決めないで。風くんの将来は風くんのものだから。絵本作家になりたいんでしょ？ その夢目指してくれなかったら、俺泣くから」

春木らしくないその顔と言葉に、反論することはできなかった。何となく押し切られたような形で、その話は打ち切りとなった。

それから風は、自分の中で何の結論も出ないままずっと毎日を過ごしていった。

ある日、いつものように学校終わりに春木の見舞いに行くと、彼は話もそこそこに風の方に手を差し出してきた。

「これあげる」

春木の手握られていたのは、かいじゅうくんのチェーン付きぬいぐるみマスコットだった。

愛らしいフォルムは、中学生男子の入院している病室には、不釣り合いにも思えた。

「えっ!? いや可愛いけど……何で？」

「最近出たやつ。ほら女子高生とかにも人気出てきたらしいじゃん？　そこでこういう商品展開

増えてきたんだって」

姉ちゃんに頼んで買ってきてもらったんだ、と春木は笑った。中学生の男子が買うには、さすがにちよつと恥ずかしいから、と。風は未だ困惑したまま、春木とぬいぐるみとを見やる。

「いやそうじゃなくて……僕には可愛すぎない？」

「いやいや、似合うよ。ナギくん可愛いし」

「絶対褒めてないでしょ……」

軽口を叩く春木に、思わず半目になってしまう。中学生にもなって、同性の友達から「可愛い」と言われるとは思っていなかった。冗談なのか、けなしているのかわからないと思いつつぬいぐるみを眺めていると、春木が乾いた声で笑った。

「ま、もし俺がいなくなってもさ、そいつを俺だと思って可愛がつてよ」

その言葉に、先ほどの軽薄な雰囲気は一気に吹き飛んで、心臓の奥の方が嫌に冷たくなった。

「どういふこと」

「いやー俺はさ、ナギくんを悲しませるのが一番嫌だから。もう戻ってこないかもしれない俺に、戻ってきてほしいって思わせ続けるのはしんどいっていうか——それよか、そいつのこと俺と同

じくらしい親友にしてやってよ」

何を言っているのか、一発で理解することができなかった。白い殺風景な病室で、風の四方だけが黒く歪んで沈んでいくようだった。

「何それ、やめろよそんなの……」

けれども、それ以上言葉を続けられなかった。春木の目が嫌に真剣で、その目を見た瞬間、喉元まで込み上げていた言葉が一気に崩れ去ってしまった。

結局、「まあ、ぬいぐるみはありがとう。大切にしろ」と札を言っただけで帰るしかなかった。

それが、春木が目を目覚めなくなる前に交わした最後の会話になった。桜が芽吹き始めた、冬の終わり頃のことだった。

それから風は、志望校より一つランクを落とした高校に入学した。春木が目覚めないまま、風は高校生になった。かつて描いていた友人との学校生活など、遠い夢のようにすら思えた。

その後二年が経ったが、未だ春木は目を覚ましていない。どれだけ検査しても、身体に異常は見当たらないらしい。あたかも普通の十代の少年のような顔のまま、彼は延々と眠り続けている。

「原因不明で眠りにについているので、また何のきっかけで目覚めるのかはわかりません」

足繁く病室に通う風、医者はカルテに目を通しながらそう告げた。できるだけ情を移さないようにしているような口調だった。

ただ、三年以上目を覚まさないと生存率が一気に下がってしまうらしい。それまでに何らかの糸口が見つかるといいですね、と曖昧に笑っていた。タイムリミットは、気が付けばあと半年になっていた。

## 5

……結局、塾が終わるくらいの時間ギリギリまで海にいて、それから何とか気力を振り絞って風は家に帰った。

母は何も言わなかったが、塾をサボったことを見透かされているような気がして、少し怖かった。

その日から風には、ハルキくんの声が聞こえなくなった。原因はわからない。わからないのだから、また何のきつかけで聞こえるようになるかわからない、と自分を慰めた。いつも励ましてくれた声が聞こえなくなったのがよかったのか悪かったのか、次の日からは心を無にして勉強に取り組むことができた。



思えば、春木に戻ってきてほしい、会いたい、と口に出したのは、あの終業式の日が初めてのことだった。それまではあの日病室で聞いた春木の言葉にずっと縛られて、風は思うように春木の目覚めを望む言葉を口にできていなかった。

(でもさ、いくら怪獣のハルキくんがいてくれても、春木くんは春木くんだもんな)

映画の新作も出たし、新しい絵本だって出た。けれども「春木くん」と、他でもない世界中にたった一人の春木蒼と一緒に楽しみたいから、風はまだどちらもチェックしていない。

夏休みが始まってから、風は春木の見舞いに行く頻度を、週一回から週三回に増やした。病室で英単語の暗記など可能な限りの自主勉強をして、英語の長文問題は読み聞かせるつもりで声に出すこともあった。効果があるかはわからないが、話しかけ続ける方がいいような気がしていた。

秋になっても冬になっても、そんな生活は続いた。春木は目を覚まさないけれど、風は会うたびに「春木くん起きてお願い」「また一緒に映画見ようよ!」「世界中の海見るんでしょ」「春木くんのねぼすけ! ばか!」などと、子供じみた台詞をかけ続けた。あの夏の日までは、何となく怖くてできなかったことだった。

春木くんのお願いが何だ、僕を悲しませたくない、忘れてほしいなんていうのは単なる彼のエゴだ、僕がそれに付き合ってやる道理はない。

そう、今では風は考えるようになった。

（僕にだって僕のエゴがあるからね）

致命的に悪い理系科目の成績のせいで医学部には行けなかったが、自分は自分にできることをやろう、と思えるようになった。勉強に勤しむようになった風を、周防なんかはよく励ましてくれた。

風は丁寧に英文を読み上げていく。ベッドサイドの通学鞆にぶら下がっている怪獣の「ハルキくん」が、そんな彼を静かに見つめていた。

受験期は、さすがに見舞いには行けなかった。日々の勉強に明け暮れているうちに、気付けば数ヶ月の月日が流れていた。

その日、ようやく受験が終わった風は、久々に春木の病室に訪れた。

「……春木くん、僕ちゃんと合格したよ」

相変わらず目を閉じたままの春木に、風はそっと語りかける。約三年の月日を経て、眠ったままの小柄な春木も、当初より一回りほど体が大きくなっていた。

「春だよ、もうすぐ春がくるよ」

君の名前と同じ季節だね、と風はつぶやく。道中で見かけた桜の蕾も、随分と膨らんでいたのを思い出した。

「まだ起きない？ おめでとうって言つてよ」

まあいいけどね、と小さく笑って、風はベッドサイドに座る。それから彼は、受験の日のことや大学での専攻のことを、春木に話して聞かせた。子供に紙芝居を語るときのような、穏やかで楽しそうな口調だった。

「そうだ、これまでは英語の長文とかでつまらなかったかもしれないけど、これからは時間ができるからさ、ここで春木くんに聞かせるためのお話し書いてくるよ。短いほうが読み聞かせやすいから、やっぱり絵本がいいかな？」

春までに目覚めるといい。でも春木が目覚めなかったとしても、五年後も十年後も、時間の許す限りここに通り続けよう、と彼は思う。そうして時間の経過とともに増えていく経験で、春木のための物語に、鮮やかな色を加えていくのだ。

ずっと話を書いて、春木くんに聞かせて、いろんな世界をふたりぶん空想して、ふたりで分け合おう。そうしていつか、春木くんがこの長い長い冬眠から目を覚ましたら、一緒にその空想を現実になろう。世界中の海を渡って、いろんな国を見に行こう。紙芝居も作ろう。

そんな未来を夢見ながら、凧は「春木くん」の穏やかな寝顔に話しかけ続ける。いつまでも、絶対に諦めない。

そうしたらいつか、もしかしたら、きっと――。

春の日差しが、病室の窓からまっすぐに差し込んでくる。もう使うこともないであろう高校の通学鞆に揺れる怪獣のぬいぐるみは、柔らかな光を浴びて、まるで穏やかに眠っているように見えた。

これから春木のために書くたくさんの物語。その記念すべき最初の物語の冒頭には、例えばこんな一文を選ぶのはどうだろう。

――僕とハルキくんは小学五年生の頃から一緒だ。

「ね、お寝坊さんの春木くん」

小学生みたいに屈託なく笑えば、眠っている彼の指先が、ほんのわずかにぴくりと動いた気がした。

# コスモス

原作 黒田ももん

本文 水面みなも

秋風にも似た爽やかさと、そつと頬を撫でるような優しい甘さ。

ほのかな香りにつられて猫は振り返る。白い日差しに照らされていたのは、ドレス姿の淑やかな女性だった。彼女は一輪のコスモスを手にして早朝の静かな公園を歩いていく。しゃんと伸びた背筋に、どこか儚い足取り。遠ざかる背中から目を離すことができない。猫はもう一度鼻をひくつかせる。そこにはコスモスのやわらかな香りだけが残っていた。

彼がここに住みつき始めてからどれほど経っただろう。青い瞳の雄猫は、町のはずれにある小さな公園にいた。遊具は滑り台とブランコだけ。朝晩に散歩している大人たちは見かけるが、遊びに来る子どもはそう多くない。彼は公園に来る人間たちを退屈そうに眺めながら、縄張りを張るでもなく、黒い毛並みを木陰に隠してただ静かに暮らしていた。

だが、あのコスモスの香りと出会ってから、彼の生活が少しだけ変わった。

ドレスをまとった例の婦人が公園に訪れるたび、彼は木陰を出て彼女を観察するようになった。彼女の足に擦り寄るでもなく、鳴いてみせるでもなく、ただその姿を眺める。気づかれなくていい。こちらを向いて微笑んでくれる、なんて大層なことは望まないから、またこの公園に来てほしい。

婦人はあの人に似ている。

あの人は突然いなくなってしまった。別れの言葉もなかった。真つ暗な部屋であの人の帰りを待っていた。彼はお腹が空いて仕方がなかったが、勝手にご飯を食べるのはいけないことだとあの人が教えてくれたから、我慢した。ようやく玄関扉が開いたかと思えば、踏み入ってきたのはあの人よりも大きな足で、途端にこちらを追いかけてくる。嫌だと鳴いても追いかけてくる。あの人は、彼が気乗りしないときは決して抱き上げなかったのに。気づけばネットにくるまれ、ゲージに移されかけていた。このまま車に乗せられてしまえば、もう二度とあの人に会えないし、あの家に戻ることすらできないのだろう。胸を内側から殴られるような感情が込み上げた。決死の力でもがき、走り、転んで、また走って、ついに今の公園へと辿り着いた。

彼は賢い猫だ。公園で幾度の夜を明かすうちに、あのとき家に来た人が彼を捕まえたのは保護するためだったということ、そしてあの人とはもう会えないのだということを察した。

あの人は病気を患っていた。

婦人のように、日向の似合う人だった。

あの人を婦人に重ねている。初めて見かけたとき以来、婦人がコスモスを持っていること

はなかったが、彼女が公園を通ると爽やかな甘い香りが漂うような気がした。彼は、彼女をコスモス婦人と呼ぶことにした。

コスモス婦人は今日も白い日差しを浴び、ドレスの裾を揺らしながら彼の前を通り過ぎようとする。婦人の目もとにはうつすらと陰がかかっていた。後ろ姿は相変わらず凜々しく見えるのに、まるでひびの入ったガラスのようでもある。彼は伏せていた体を起こし、木陰から彼女を窺う。コスモス婦人は、ひとり、静かな路地を歩いていく。

——彼があの人のもとで暮らしたのはそれほど長い時間ではなかった。この世に生まれてから数年間、彼は里親のもとで引き取り手を待っていた。兄弟姉妹が次々と新たな家族を見つけていくのに、自分を選んでくれる人はなかなか訪れない。この世界の人間たちはあまり黒猫を好まないらしい。艶やかなこの黒い毛並みを彼自身は気に入っていたが、飼い主候補が兄弟姉妹を連れていくたび、彼らの背中が眩しく感じた。

そんなときにあの人が見れた。彼と視線を合わせるようにしゃがみ込むと、それから数分あの人丸い瞳が逸らされることはなかった。こんなふうにじっと見つめられるのは初めてだったから、彼は落ち着かなかった。何度か面会するうちにあの人やわらかい微笑みが彼の心をほぐしていった。そして、あの人と家族になった。



——わずかに足音がして、彼は目を開く。昔の夢をみていたようだ。顔を上げると今日もコスモス婦人が公園に入ってくるところだった。曇り空でじめじめとしているが、彼女のまとったドレスはレースがなびいて涼やかに見える。優しい甘美な香りが近づいてくる。この香りと同じように、きっと婦人は上品な暮らしを送っているのだろう。天井の高いリビングで紅茶を飲みながら、庭を眺めるのだ。もし彼女の足元に黒猫——彼がいれば、大きな窓から差し込む日光を満喫したことだろう。彼女なら、あの人のようにそっと背中を撫でてくれるのかもしれない。

彼は気まぐれに彼女のあとを追う。アスファルトが朝日を照り返し、じんわりと目に染みる。雲のようにふわりと揺れるドレスは、既に道の向こう側。見えない手に引かれるように歩を進め、曲がり角に消えていく彼女に焦りながら、白線を越えて地面を蹴る。

悲鳴のようなクラクションが鳴る。浮遊感を覚えたのは一瞬のことで、体勢を立て直す間もなく地面に叩きつけられた。視界の端に映る車から、もう一度、今度は舌打ちのような短い警告音。静かな早朝には似つかわしくないその音に急ぎ立てられ、後ろ足を引きずりつつ道路の端へと逃げる。うずくまった途端、脚の痛みを自覚する。

血管が脈打てば、その度に切り裂かれるかのような激痛が走り、彼は歯を食いしばった。

この辺りで縄張りを張るような猫たちからすれば、接近する車に気づけないような彼はどんくさく見えるのだろう。いまさら野良猫にもなりきれない。しかし、再び孤独を味わうくらいならこのまま中途半端に生きていたほうがマシだとも思う。いや、こんなありさまで生きていけるのか？ 本当は今も、あの人のような主人を求めているのかもしれない。

いつまでも地面に伏せているわけにはいかず、かろうじて踏ん張りの利く前脚を使い上体を起こそうと試みる。だが、力がうまく伝わらない。はたから見たら、産まれたての小鹿のようなサマだろう。彼は冷たさの残るアスファルトに逆戻りした。

影がかかった。頭上から声が降る。高くも低くもない、朝風のような女声だ。けれど彼を案じる色かにじんでいる。大丈夫か、怪我をしている、そのような言葉が聞こえた。

彼は、その声を懐かしく感じた。あの人が助けにきてくれたのか？ 以前彼が体調を崩したときに、片時も離れず気遣ってくれたあの人の声色がよみがえった。苦痛や不安を忘れさせてくれる、その穏やかな口調が心地よい。きっともう大丈夫だ。

地面から体が浮く。丁重な手つきで抱きかかえられ、温もりに安堵した直後、ほのかな香りに気づいた。

声の主は、コスモス婦人だった。

彼はそのまま動物病院に連れていかれ、治療を受け、再び抱かれたのち婦人の家のソファに身をうずめている。彼女は水とご飯を与えてくれたが、それ以上過度に彼を構うことはしなかった。それでも、後ろ脚がともに動く状態であれば軽く跳ぶだけで接触できる距離にいる。これまで彼女に対し自ら透明な壁を築いてきた彼女にとって、この近さは慣れないけれど、妙に落ち着いた気分になされた。

婦人の家は、想像通りの淑やかな様子だった。彼女一人で暮らしているにしては広く感じられるが、手入れは行き届いている。ささやかな庭に繋がる窓のそばが彼のお気に入り。婦人はそこに白く丸いソファを置いてくれた。

窓の向こうでは花々が秋風に揺れている。色とりどりのパンジーやビオラ、名前のわからない小さな紫の花、そしてコスモス。淡い桃色と白色が植木鉢の大半を占めているが、一部に暗い赤色も見受けられた。ただその風景を眺めているだけで心が穏やかになる。だがそれ以上に、庭に出て花の手入れをする婦人の姿を見るのが幸せだった。

自然とあの頃が思い出される。窓辺で日向ぼっこをしていた彼に、あの人は教えてくれた。あれはチューリップ、あれはマーガレット。夏になると庭にヒマワリも咲いた。涼しくなった頃、あの人は白い花を指し、あれはコスモスだと言った。

あの人もガーデニングが趣味だったようで、季節が移り変わろうと庭が寂しくなることはなかった。玄関に面した道路には金木犀が咲いていた。あの人が扉を開ける度に甘ったるい匂いが鼻にまとわりつく。彼は、庭のすみっこに咲くコスモスのほうが好きだった。金木犀の香りは強すぎる。コスモスのように、そつと日々を彩ってくれるもののほうがいい。

怪我が癒えてきた頃には、彼も素直に婦人に甘えるようになった。肌寒い朝は彼女に擦り寄り、膝の上へと抱き上げてくれるのを待つ。

しかし、彼女とのあたたかい時間を重ねるにつれて、過去のものであったはずの孤独感が砂時計のように降り積もる。この幸せはいつか終わるのだ。開かない玄関扉を眺め続けたあの家での記憶が、今も彼の心を蝕んでいた。婦人もあの人と同じ人間である。暗い部屋に取り残されるくらいなら、明かりが点いているうちに逃げてしまふべきだ。

決意を固めたその日、彼は彼女の寝室に忍び込んだ。滅多に入れてもらえなかったその部屋には、一枚の写真と赤黒いコスモスが飾られていた。フレームの中で婦人は男の人とともに微笑んでいる。彼女はひとりにならない。そこにはお菓子かと思うほどの甘さが漂っていた。

そして、彼は婦人の家を出た。

戻ってきた公園で、彼は以前と同じように慎ましく暮らし始めた。コスモス婦人も変わらず公園にやって来た。違うのは、彼女が彼を見つける度に保護しようとする事。どうやら心配してくれているらしい。これまでの生活に戻るだけだ、そこまでヤワな猫じゃない、という気持ちを込めて一声鳴いてみせると、それ以降、彼女が無理に彼を連れて帰ろうとする事はなくなった。

その代わりに日課ができた。婦人が彼に話を聞かせてくれるようになったのだ。彼女を嫌って抜け出したわけではない、ということも伝わったようである。安心して。

カーディガンを羽織った彼女と並んで、公園の隅のベンチに体を伏せる。彼女は日常の些細な出来事をコスモスの香りと一緒に届けてくれる。昨日の夜はシチューを作ったとか、街の外れで古本屋を見つけたとか、彼女を構成するパズルの一ピースにも満たない、小さな事柄に耳を傾けるのだ。日に日に絵が埋められていく一方で、ただ、いまだに彼女の輪郭を捉えきれないと思う。

穏やかな微笑を浮かべながら、彼女は両腕をさすり、目を伏せる。寂しさを噛みしめるような顔をする。

湿った匂いを嗅いだ曇天の日、婦人はその表情の理由を語ってくれた。

別れの話だった。彼女には最愛の人がいた。将来を誓った相手だったそうだ。一人暮らしにしては広すぎるあの家で、二人掛けのソファに座って映画を観たり、キッチンに並び立って少し凝った料理を作ったりしたのだろう。本当はその人にシチューを食べてほしかったのかもしれない。行ってみたかった喫茶店でお茶をしてきた、と言った日があった。本当は彼と行くつもりだったのかもしれない。あのコスモスも二人で一緒に植えたのだろうか。彼女はどんな気持ちで水をやっていたのだろう。愛は枯れるのに、蒔いた種は律儀に花を咲かす。婦人はひとりだった。

初めて涙を見た。せめて雨は降らないでくれと彼は願った。

黒い尻尾を婦人の手に乗せながら、彼は思い出す。あの人と過ごした昼下がり。窓の向こうで揺れる花卉。すらりと伸びた指先が彼の顎から背中へと伝い、さらさらと毛並みをたどる。見上げたあの人の顔はまるで仏のようだった。起こりうるすべての事象を受け入れる準備は、とくに終わらせていたのだろう。生命を育む春の陽だまりのような笑みを携えて彼を抱きつつも、おそらく、そのあたたかさが長くは続かないとわかっていたのだ。

あの人も孤独を恐れていたのだろうか。コスモス婦人が流した涙は、あの人を抱えていた寂しさと似ているように思えた。

夜が長くなり、いつのまにか木の根元には枯れ葉の布団ができていた。コスモス婦人はからし色のジャケットを肩にかけてくるようになった。たとえコスモスの季節が終わろうと、日が昇りきる前の薄暗い公園で彼女と過ごす時間は、特別なものに変わりなかった。

しかし環境は変わる。彼の住処は、雨も朝日も降り注ぐ小さな公園から、会話の止まぬ一軒家になった。

彼は新しい飼い主に拾われた。そこは笑顔あふれる理想的な家庭で、彼の主となった夫婦と小学生の女の子は、彼に名を与え、家族の一員として迎え入れてくれた。見知らぬ土地で始まった生活は新鮮だった。賑やかな暮らしもまたいいものだ。あたたかい家族のいるこの家では、ひとりになることはないだろう。

二階には女の子の部屋がある。愛らしい動物柄のカーテンは、子どもらしく無邪気な印象を与える。女の子が学校へ行く間、彼は勉強机に上り、レースカーテンをくぐって窓の外を眺めていることが多い。外を歩く人の大半は重いコートを身につけていた。隣の家から赤ちゃんの泣き声が聞こえる。あちらこちらに青い瞳を向ける彼は、コスモス婦人の幻影を追っていた。あの公園を訪れることはもうしばらくないだろうが、一目まみえるだけでもいい、彼女がどうしているかを知りたい。

彼はふらりと家を出た。からりとした木枯らしの吹く夕暮れだった。住宅街を抜けてぐんぐん先へ進み、レンガ街へと踏み入れる。スキップをしたくなるような、浮世離れた場所だ。通りすぎる人々は彼を目にとめると途端に顔をほころばせる。優雅でゆとりのある雰囲気の中、夕陽に照らされた赤レンガが映える。

ふわりとやわらかな香りを嗅ぐ。天高く透き通るような爽やかさが、ほのかな甘みをやさしく包み込んでいる。

コスモスだ。

彼は振り返る。石畳の上で揺れる白いドレス。はやる鼓動を抑えながら見上げると、淡い桃色のコスモスを髪に飾った、あの婦人の姿があった。その隣にはすてきな人がいた。石畳を歩んでいく二人にはスポットライトが差している。周りの花々が大きく笑う。彼は二人から目を離せなかった。最後に婦人と会った日、行きたい喫茶店があると彼女は話していた。これから二人でお茶をするのかもしれない。もう彼女はひとりではない。

後ろ姿を見つめながら、残った香りを確かめる。これまでに何度も嗅いできた。鼻の奥を抜ける。ゆつたりとあくびをしたのち、彼は満足げに去っていく。

人間にとってコスモスの香りはほんのわずか。きつと気づけるのは自分だけ。



# 山の声

原作 水面みなも

本文 作花霖

通話口の向こうから、微かに鶏の鳴く声が聞こえる。コケコッコー、コケコッコー……気の抜けた声だ。それを背景に、緊張感のないころとした笑い声がかさとしたノイズと混ざって新堂の耳に届く。

『いやあ、毎度毎度ご苦勞なこつて』

「そう思うなら謝罪の一言でも——いえ、原稿の一字でも進めたらいかがです」

『と言われましてもなあ、こつちもこつちで色々忙しいんや。堪忍な』

「色々って」

相も変わらず悪びれた様子のない飄々とした声色に思わず溜息を溢しながら、新堂は眉間を軽く揉んだ。眼裏にちりちりと星が飛ぶ。近頃は多忙と心勞が相まってすっかり寝不足だった。原因の八割は通話相手であるこの小説家——源<sup>みなもと</sup>縁である。出会ってかれこれ一年は経つが、未だに彼の扱いがわからない。この奇妙な名前も、正真正銘の本名なのだと本人は言うが、本当のところどうなのか怪しい。

それでも、ここで自分がへこたれてはお終いだ。気合いを入れ直し、新堂はその場で正座して背筋を伸ばす。

「兎に角、仕事は仕事です。私は貴方に書かせるのが仕事。そして貴方は書くのが仕事、わかり

ますね？」

『うーん、せやけどなあ』

この期に及んでまだ言い訳を重ねようとする。一体次は何が出るのやら——先週は実家で飼っている鶏の大量脱走だったか。鶏の大量脱走？ そんなことがあってたまるか。新堂とて信じたわけではない。期日までに原稿を書き上げるのが作家という職業であるはずなのだが、しかし往々にして現実はその上手く運ばないということくらいは、入社そこそこの中堅編集者としてよく身に染みていた。

『祭りの準備がちよつと、なあ』

「はあ？ 祭り？ なんですって」

『やー、編集さんは都会のお人やからこういうのには疎いんかもしれんけどなあ。田舎じゃあ、地元の祭りに協力することはその村で暮らしていく上での義務なんですよ。手を抜こうもんなら、あゝもう、想像しただけで怖い怖い』

わざとらしく芝居がかった話しぶりに呆れながら新堂は考える。義務？ ならば作家としての義務はどうなるのだ。

『やけど祭りは豪華なもんよ。皆で気合い入れて準備するだけあるわ、編集さんも来はったらえ

えのに』

「先生が小説を書いてくださるのなら」

『おお、せやなあ。編集さんがこんな辺鄙な田舎まで遊びに来てくれるんやったら、そりやあもう嬉しゅうて僕の執筆意欲もぐんぐん湧いてくるかもわからんなあ』

「では行きます」

『おお？』

意外そうな声が返ってきた。自分から誘っておいてなんだ、と思う。編集者の仕事は作家に原稿を書かせることだ。そのためならば、地の果てまでも追いかけていく覚悟はある。

『えらいフットワークの軽さやなあ。編集さん、どないしたん』

「いえ、長らく対面でお会いできてませんでしたし、直接会って文句の一つでも言ってやろうかと思ひまして」

『そっかそっか。ほな、楽しみにしてます』

敢えて強い言葉を選んだのにも拘らず、源は面白がるようなトーンでけろりとそう答えるだけだった。相変わず食えない作家だ——まあこれ以上の催促と説教は、実際に会って伝えればいいだろう。電話を切ろうとして、寸前、一層強いノイズ音が耳に飛び込んできた。一瞬面食らう

が、やはり相手は山の中だ、通信が悪いのだろうと新堂は推測する。顔を顰めながら通話終了ボタンを押して、再三、溜息を吐いた。



残暑は厳しいが、山を望む無人駅にはゆるやかな風が吹いていた。駅周辺には見渡す限り何もない。本当に何も無かった。当然だが、東京とは大違いだ。

「おお、編集さん。ほんまに来てくれはったんですね。びっくりやわ」

「時間の約束までしておいて、連絡も無しに反故にするような人間だと思われていたとはそちらの方が驚きです」

「相変わらずやなあ編集さん」

ケラケラと笑う源は、軽トラに乗って駅前に現れた。新堂にはトラックを運転した経験はない。ここでも文化や環境の違いを実感する。

「まあ、よう来はったわこんな辺鄙なとこまで。とりあえず乗ってくださいな」

「ありがとうございます」

促されるまま、軽トラに乗り込む。軽快なエンジン音を響かせて、車はすぐに発車した。

「家は遠いんですか？」

「いや、そこまでですよ。これから十五分くらいかな」

「それは、車で？」

「ええもちろん」

充分遠いではなからうか。この辺りも自分とは感覚のズレがあるのだろう、と新堂は考える。車は吹く風と同じくらいゆるやかに走った。砂利の転がる道を走るので時折振動が伝わってくる。周囲はどこを見渡しても田園風景だった。

「おおー、エンちゃんやないか」

開け放した窓の外から中年の女性の声が出た。何かとそちらを見遣ると、畑仕事をしている婦人がこちらへ向かってにこやかに手を振っている。源は声の主を認識するとすぐに声色を人懐っこい甘えたものに変えて、

「お、佐伯のおばちゃん。なんや久しぶりに顔見るなあ、元気しとった？」

と破顔した。

「それがついにこの間ギックリをやってしもてなあ、つい昨日復活したとこや」

「ええー！ 全然聞いとらんでそんな話。もう動いて大丈夫なん」

「すっかり元気よ。せや、エンちゃん、これ持っていき」

婦人は何か思い出したようにいそいそと踵を返し、奥の倉庫のような場所へ引っ込んだかと思いきやすぐに戻ってきた。両手にとっても長いゴボウを掲げるように持っている。この畑で育てたものだろうか。

「夏ゴボウよ。うちで獲れるのがいちばん美味しいって、村の中でも評判なんやから」

「おー、ええんかこんなに。はあ、立派なもんやわ。ありがとさん」

ニコニコと会話を交わす源と婦人の両名を、新堂はどこか据わりの悪い心持ちで眺めた。知らない世界だ。自分に馴染みのないもの、縁のないものが確かにこの世界のどこかで当たり前のものとしてそこにあるのだと意識させられるとき、いつだって少し緊張する。全てを知りたいなどと願うのは人間の傲慢である。そのこともまた、よく理解している。

婦人と別れると源は再びゆるやかなスピードでトラックを走らせた。彼の言葉通り、源の自宅へ到着するまでには十五分ほどかった。

家は平屋で、横に長かった。いわゆる田舎の家だ。母の実家も確かこのような様子だっただろう。最後に訪れたのは幼少期なので、記憶が薄い。

「狭い家やけど、まあどうぞ」

「嫌味ですか」

居間に通される。源は令和の世において非常に珍しく手書き執筆派で、机の上には書きかけの原稿用紙が散らばっていた。一瞥をくれて、新堂は口を開く。

「進捗はどうですか」

「ぼちぼちやなあ」

あまり芳しくないようだった。今すぐにもカンヅメにしてやろうか、しかし祭りとやらが終わるまで待つてやるのが人情か、いやそれでは甘すぎる、などと思いを巡らせていると、源が不意に得意の大好きにする笑みを浮かべ、甘えた声を作った。

「そんなことより編集さん、うちの子ら見ていきませんか？ 鶏なんて都会じゃ普段見ることないでしょう。皆元気なもんよ。編集さんに会いたがつてるわ」

「――、はあ」

「それから、その山に溪流があつて魚がよー釣れるんよ。よかつたら一緒にどうですか」

「……貴方、原稿を進める気は？」

「あるある、ありますよう。ちょーっと編集さんと釣りしたら気合いも入つてあつという間です」



わ

「はあ……」

付き合いきれない。それなのに、不思議とこの人の言葉には引つ張られてしまう。いつも気づけばまんまと乗せられているような感じがする。

「その山というのは、近いのですか？」

「十五分くらいですねぇ」

「それは車で、ですか？」

「んーん、徒歩やね」

「……」

鶏は静かだった。あの日電話越しであんなにけたたましかったのは何だったのだと思うほどだった。源は一羽一羽、丁寧に名前を覚えてくれた。

「あれがデネブ、アルタイル、ベガ……」

どこかのアニメソングのようだとぼんやり思った。なぜこの作家は実家の鶏に星の名前をつけているのだろうか。

それから二人で十五分歩いて、山の溪流へ行った。作家は二人分の釣り道具を持っており、や

けに手慣れた様子であつという間に準備を整えた。

「本当に釣れるんですか？ 他に釣り人は見当たりませんし、かなり流れが速いですよ」

「けっこういけるんですよえ、これが。まあ騙されたと思って、編集さんも」

正直、まったく釣れずにすぐに引き返す羽目になればいいと思った。

源には話していないが、ここへ来るまでの道を歩いている途中、漠然と嫌な感覚があつた。薄暗い森の中だ、都会とはかけ離れた環境であることも相まって、緊張してしまったのだらうと新堂は自分を納得させる。風が木の葉を揺らして、ざわざわと音を立てるのに、やはり気持ち落ち着かないまま渋々と川辺に腰を下ろした。

源も新堂の隣に座り込む。距離がいやに近い。この作家にはパーソナルスペースという概念がないのであつた。

「——なあ、編集さん」

川はさらさらと流れる。かすかに差し込む木漏れ日が水面で踊っていた。水はひかって見えるのに、新堂たちの座る川縁にはただ影が落ちている。湿った風が作家のすこし伸びた髪を揺らした。

「東京って、そないにええところですかねえ」

咄嗟に返事を寄越すことができなかった。自分は大学を卒業し、就職と同時に東京へ出てきて以降ずっと東京暮らしだ。もう十年ほどになるだろうか。慣れたか否かと問われれば、「慣れた」と答える他ない。東京で暮らす中で、特に不便さや息苦しさを感じるようなことはなかった。

「……どうでしょうね。田舎の人が思っているほど、息の詰まる場所ではないですよ」

「はあん、それはそうかもしれないなあ。田舎は人付き合いが密接やから、人嫌いには却って都会がええとも言いますね」

「よくご存知で」

「一応、物書きが職業なもので」

源が実家の養鶏場を手伝いながら新人賞に投稿し、受賞したのは数年前のことだ。デビュー作が大きな反響を呼んだのをきっかけに、現在は文芸誌で二作目の長編を連載している。定期的に打ち合わせや催促の必要が生じるので、東京に住んでもらったほうが出版社としては都合が良いのだが、本人は頑なに実家のある僻地で暮らすこの生活をやめようとしなない。

「しかし、僕にはどうしてもそうは思えへんのですよ」

「東京がいい場所に思えない、と？」

「まあそういうことです。僕と同じくらいのやつらはみんな都会へ出てもうたけど」

源はそこで、言葉を切った。

「山はね、編集さん。生きてるんですよ」

「はあ」

話の脈絡が見当たらない。木々がざわめき、不気味な音を立てる。

「生きてるんです」

源は繰り返した。不意に、どこからか視線を感じる。見られているのだ、と思った。ぶるりと背筋を震わせる。

「この辺りは妖怪や幽霊の噂も多くてね。僕も何回か遭遇したことがあるんですよ。頭の堅い編集さんには、こないな言うても信じてもらえんやろけど」

「……そうですか」

周囲の気温が少し下がったように感じる。源は相変わらずけろりとした横顔だ。底の見えない瞳で、楽しげに笑う。

「利便性に毒された都会より、こっちのがよっぽどええわ。俺は好きやから、佐伯のおばちゃんやら、他にも近所の人々と話するのが好きやけど——でもそれ以上になあ、一番楽しいのは、自然と会話することですよ。編集さん。山と話したことはありますか？ 無いでしょ。無いんで

すよ、都会に住んでたらね」

無邪気な声が少し不気味だった。機嫌が良いのか、いつもより舌つ足らずな作家が「おっ、掛かったんちゃうか」と釣り糸が揺らぐのに目を細めた。

気づけば源は既に何匹も釣り上げていたようだった。新堂の方は一匹だつて釣れやしない。

「編集さんはなあ、まっすぐやなあ。まっすぐで真面目や。ええ人やけどね、もすこしゆるーく生きた方が楽ですよ」

また話が変わった。何も答えられない。褒められているのか貶されているのか、よくわからなかった。

気づけば日が落ちかけていた。東京からここへ来るだけで随分と時間がかかってしまったから、一日がやけに短く感じる。「そろそろ行きますかねえ」と源が立ち上がった。

「帰らんと、お祭りが始まってしまいますわ」

「ああ、忘れてました」

新堂が呟くと、ご冗談を、と笑う声が返る。

「暗いから、氣いつけてくださいね。僕についてきて」

源の言葉に従い、その場を立った。二人で黙って獣道を進む。草木を掻き分けてすすい進む

源は、いつもののらりくらりした態度とはまるで違った様子で、別人のように見えた。置いていかれそうな不安を不意に覚え、新堂は慌ててその背中を追う。彼は山に慣れているから迷わないのか。いや、まるで山に好かれているかのようだ。導かれているのか。

暗い。急に視界が悪くなる。

「——えっ？」

視界に靄がかかったようだった。ただでさえ光の入らない中だ、源のように夜目は利かない。必死に手足を動かすが、源は遠ざかっていく。

「待って、先生、待ってください」

叫ぶ。遠くから、獣の咆哮が聞こえた。新堂の声は掻き消される。ずるりと右足が滑り、暗闇に落ちる。

悪い夢の中のようなだった。

折れた枯れ木や石が全身を突き刺す痛みには耐える。転がり落ちて、しばらくしてから視界が開けた。先程までとは様子の違う山の中だった。源の姿は見当たらない。

真昼のように蝉が鳴いている。

「どこだ、ここ……」

途方に暮れて呟く。

ふと、この場所に見覚えがあるような感じがした。必死に記憶を辿り、頭を回転させる。蟬の  
声が煩く、思考の邪魔だ。切れ切れの嫌な記憶が脳裏で明滅する。

——耳元で、つんざくような鳴き声がした。

「……っ」

木々がざわつく。先の溪流でのそれより、幾分か激しいように思える。

見られている。早く逃げなければ。重い一步を踏み出した瞬間、体が傾き、何かに吞まれた。

「!?」

声も出なかった。思わず目を閉じる。

絶叫が響く。自分の声ではない。否、それすらもわからなくなっているのだろうか。赤黒い何  
かが視界を染める。

意識が遠ざかる。

暗転。

はっとした。

「あ、起きました？」

呑気な声に飛び起きる。呼吸が整わない。着慣れたシャツの背中が尋常でない量の汗で濡れていた。

ひぐらしの鳴く声が聞こえる。源の家の縁側だった。

「……私は寝ていましたか？」

「そもそも、よー寝てはりましたよ。お祭りも終わってしもて、残念やなあ」

そんなことがあつてたまるかと思う。まだそこまで時間は経っていないはずだ。ぼんやりとする頭を持ち上げると、源はふと思ひ出したように「せや、編集さん」と手を打った。

「原稿、書き終わりましたよ」

「え？」

「ほらこれ。見てください」

原稿用紙を受け取る。今朝この家に来た時点では考えられないほどの進捗だった。

「な、これで編集さんも来た甲斐があつたつもんやろ？ ご満足ですか」

「は、はい」



手元の原稿に目線を落とす。間違いなく源の筆跡だ。狐に化かされたような心地だった。ひぐらしに混ざって、遠くの方で蟬の声が鳴る。

自分はあるの山に嫌われている、と、ふと思った。血の匂いがする。自分の体に染みついた匂いなのか。わからない。頭の奥に引つ掛かつて、思い出せない記憶がある。

どうしてか、源の顔を直視するのが怖かった。

早くここから逃げなければ、と思いつく。一度考えつくと、そうする以外の正解が見当たらなかった。新堂は立ち上がる。源が首を傾げる。

「どうしたんですか、編集さん。もすこしゆっくりしていきはったらええのに」

手を引かれて、再びその場に座らされる。大した腕力ではない。十分に抵抗の余地はあったはずだった。

「……」

原稿から目を離すことができない。

またあの叫び声が耳元で鳴ったような気がした。それが幻聴なのか否か、新堂にはわからなかった。



# テーマ外作品



# サボテンと犬

谷山大哉

肉の匂いを嗅ぎつけて魚たちが群がり始める。水面で飛び跳ねた魚の鱗が朝陽を反射してキラリと光る。

大空を旋回していたトンビが狙いを定め、ナイフのように空を切り裂き瞬くうちに獲物を捉えた。

顔面蒼白の夫婦は静まり返った薄暗い居間で銅像みたく動かず、ただ頭を抱え込んでいる。どちらも一睡もできなかった様子で、目の下には黒い不安がべつとり貼り付いていた。

同時刻。香水と女が吐き出すアルコール混じりの寝息とでホテルの一室は目眩を起こしそうな匂いで充満している。赤く染めた頭髮は色が抜け始め、目元に引かれたアイラインは不格好に滲んでいた。

女のワンピースに散りばめられたスパンコールで朝陽が弾けたちようどその時。

あるアパートの一室で、生ごみのような鼻を刺す臭いで目覚めた青年が顔をしかめつつ頭の中では昨夜の体験を再生し悦に浸っていた。

一つ壁を挟んですぐ隣。窓の隙間から侵入した蠅が生殖のために忙しく飛び回っている。

そのアパートの下の子童公園では、耄碌した老人がベンチに腰掛けて遠くの空を眺めている。

今日が何年の何月何日か、自分が今どこにいるのか、そして自分が誰なのかを忘れてしまうほど

に惚けてしまっているために、空を切り裂くように急降下した鳥の名前を思い出せずにいた。

\*

みづきが目覚めると朝陽がまっすぐに目に飛び込んできた。目をゆっくり開けると、みづきは河川敷の土手に寝転がっていて不思議だなと思った。なぜだか体がほんのちよつと湿っていて、髪の毛は少し濡れているから夏なのに寒い。くしやみが出そうで出ないからユーウツだ。

でもどうしてあたしはこんな所で寝てしまったのだろう。なんだか嫌な夢をずーつと見ていた気がする。真っ暗で息苦しくて怖くて痛くて、恐ろしい怪物に体を掴まれてからそのあと目の前が白くなってきて……そんな夢を見ていたような気がする。みづきはぶるぶる震える体を両手でしっかりと抱いた。

みづきは湿った体を陽の光で乾かしながら、こんな所で寝てしまった理由を思い出そうとした。たしか昨日は土曜日でピアノ教室の日だったから七時に起きて、ママの作った朝ご飯を食べて歯

磨きしてパパと遊んで、それから家を出たのが……えーっと八時と九時のあいだに家を出たんだわ。それから隣の家のおばさんに話しかけられて、みづきちゃんは一人でお出かけできてエライってほめられて、おばさんの家に猫がしょっちゅうやって来るって話を聞いて、あたし退屈だからあくびしちゃって……それからそれからえーっとピアノ教室に着いたのが九時よりすこし後だったわ。本当は九時からレッスンなのに、遅れてしまったからマリ先生にちよっぴり怒られたんだった。レッスンが十時に終わってそのあとピアノ教室のユカちゃんとエリちゃんと一緒に遊んで、お腹がすいたから近くの駄菓子屋さんに皆で行って、でもエリちゃんは『いつけない、お母さまの作ったお菓子しか食べちゃいけない約束だったのを忘れていたわ』って言ってあたしにチョコビスケットをくれたんだ。それから皆とバイバイしたあと……だめだ、全然思い出せない。みづきは頭をぐるぐる回して何とか思い出そうとするが、いっこうに思い出せない。自分がどこにいるのかさえもさっぱり分からない。みづきはママとパパに会いたくて泣きそうになっただ、ぐっと我慢した。

「ここはいつたいどこなんだー!!!」泣くかわりにみづきは大声で叫んだ。

「そうだ、もうあたしは七歳なんだから泣いちゃいけないよ」

みづきは気分を変えるために傍らに生えたタンポポの綿毛をもぎ取って息を吹きかけた。みづ



きはタンポポの綿毛が空に向かって飛んでゆく様子を眺めるのが好きなのだ。光を浴びた綿毛がほんのり白く輝きながら空を舞う様子は、天使が踊っているようであつとりしてしまふのだ。

みづきは綿毛が全部遠くへ飛んでいったのを見届けて、決心した。

「あたしぜつたいにママとパパを見つけてみせるわ」

みづきはタンポポの綿毛が旅に必要な物だと感じたので沢山もぎ取ってから歩き始めたが、すぐに風が吹いて綿毛は全部飛ばされてしまった。またどこかで新しく生まれてくるだろうと思えば、綿毛がみんな飛んで行ってしまったこともあまり悲しくなかった。

みづきはなんとなく、綿毛が飛んで行った方へ向かつて旅に出た。

みづきは土手沿いに歩いた。ちょうど川が流れる方向とおんなじ向きだった。朝早くからランニングする人や犬の散歩をしている人とすれ違ったけど、みんなみづきには目もくれなかった。

歩いているとみづきの頭の中にいろんなことが浮かんできた。ママとパパはいま何をしているだろうか、ひよつとしてまだ寝てるかも。あたしがいない事に気付いて探してくれているのかな、心配してくれてるかな。もしかしてあたしがいなくなってもなんとも思っていないかも、けれどそれはとっても寂しい。ママとパパを見つけたらきつと抱きしめてくれるはずよ、だってママと

パパはとっても優しいんだもの。

みづきは自然に溢れだした涙をワンピースで拭って探検隊の鼻歌を歌った。探検隊っていうのはパパが好きな四人組のロックバンドの歌で、あたしもとっても好きだ。

うーうーうー、ふんふんふーんふふん♪

なんだか心が軽くなった気がしてスキップしたり、ひょこんと飛び跳ねたり、くるりん回ったりした。

地面に着地するたびにスニーカーの裏側が地球を回しているんだなって気持ちがして楽しかった。

「やっぱり音楽って良いよなあ」

みづきが軽い足取りで進んでいると、いつの間にか住宅地に迷い込んでいた。

肌着のままのおじさんが家の前で枯葉をせっせと掃き集め、別の家ではエプロン姿の女の人が郵便受けを確認する。どこからともなくお味噌汁の匂いやパンの甘い匂いが漂ってきてお腹が空いてきた。

狭い路地から猫がニャン。車の下から猫がニャン。屋根の上から猫がニャン。

猫たちはみづきをじっと見つめながら鳴いた。みづきは猫の一匹ずつにごきげんよう、ごきげんよう、と挨拶をする。

ごきげんようっていうのはピアノ教室のエリちゃんのお癖。エリちゃんはお金持ちのお嬢様で、あたしの家はIPPANKATEIだってママが言ってた。IPPANKATEIっていう意味かってママに聞いたらフツってことよと教えてくれた。こんどはフツってどういう意味かってママに聞いたらフツはフツよって言ってた。フツってなんだろう。あたしの家はお金持ちの家じゃないかもしれないけれど、フツもフツで悪くない。

みづきが通り過ぎる電信柱を二十本近く数え終えたとき、少し先の曲がり角のあたりに白猫がちよこんと座っていて、招き猫みたいに前足を前後に動かしていた。

みづきは恐る恐る、でも興味津々に近づいて行つた。

わたあめみたいなふわふわの白い毛、山奥にある湖のように透き通った青い目、でも鼻先と肉球は黒ゴマ団子みたいな灰色だった。白猫はニャンと鳴いてみづきをじっと見つめた。

「あなたノラ猫？ お名前はなんているの？ あたしはみづきっていうの」みづきは白猫の前足を握った。

「ニャン」白猫はみづきを見つめながら鳴いた。

「そう、あなたはミーコなのね。よろしく」

白猫のミーコは顔をしかめてフンツと鼻息をたてた。

「だめよそんなにブスつとしちゃあ。犬とか猫は可愛くしなくちゃいけないのよ。じゃないと捨てられちゃうんだから」

ミーコはみづきの言葉をあまり聞いていない様子で前足を丁寧に舐めたあとで、ついてこいでも言わんばかりに首を振ってから優雅に歩き始めた。

「待って、だめよ。あたしはママとパパを探さなくちゃいけないの」

ミーコはみづきの先で振り返ってミャーオと鳴いた。

「そうね、悲しいけれどお別れよ。じゃあね」

みづきはまた一人歩き出した。振り返ればミーコがとぼとぼついて来ていた。

なんだ、ミーコはとっても寂しんぼなんだわ。

みづきはもう一度振り返った。けれどもそこにミーコはおらず、背の高い女の人がかつちに向かつて歩いているだけだった。

ぎいーぎいーとブランコが揺れるたびに嫌な音がする。みづきは歩き疲れて公園のブランコで

ひと休みしていた。ほかの子供はぜんぜんなくて静かな公園だった。太陽がギラギラ照り付けているから頭から背中から汗がしみ出るのが気持ち悪くて、みづきは日陰を探した。

公園の真ん中にゾウの滑り台があって、ゾウのしっぽが階段で鼻が滑り台になっている。ちょうどゾウのお腹あたりがトンネルになっているので、みづきはトンネルの中で一休みしようとトンネルをくぐった。

「きゃっ、あなただあれ？」トンネルには小さな男の子がいて、みづきはびっくりしたのだ。

「りくと」男の子はプラスチックのスプーンとフォークを両手に握っている。

「あたしはみづき。ちょっとここで休んでもいい？」

男の子はこくりとうなづいて、スプーンとフォークで地面をザクザクし始めた。

男の子は首も腕も足もリコーダーみたいに細くて、髪の毛はぼさぼさでよく見ると小さな綿埃が絡まっている。肌はおかしなくらい白くて、爪はずーっとながい間切っていないみたいに見える。

りくとは相変わらず地面をザクザクしている。

「あなたさっきから何してるの？」

「これ」りくとは鼻をつまみながらスプーンに乗せられた茶色いカタマリをみづきに見せた。

「うわあ、それ猫のうんちだよ」みづきは顔をしかめる。

「これ、食べられる？」りくとは笑いながら聞いた。薄い唇からのぞくすきつ歯は黄色かった。

「食べれるわけじゃない。お腹こわしちゃうよ」

「そっかあ」りくとはとても残念そうに猫のうんちを捨てた。

「あなた何才？ あたしは七歳」

りくとは右手でパーの形を作ってみづきに見せる。

「じゃああたしの方が二歳お姉さんね」

「ぼくはおとうと？」そう言いながらりくとのお腹はグルグル鳴った。

「まあそうね。ところであなたお腹空いてるの？」

「うん、さがしてるんだ、食べるもの」

しかたがないわねえと言ってみづきはワンピースのポケットを探った。たしか昨日エリちゃんがチョコビスケットをくれたはず。エリちゃんはお嬢様だからチョコビスケットなんか食べちゃいけないってお母さんに言われてるんだ。

「これ食べていいよ」みづきは個包装のビニールを破ってりくとに渡した。

「うわあ、ありがとう」りくとはビスケットをむしゃむしゃ急いで食べた。

「あなた家はどこ？」

「あそこ」

りくとはゾウのトンネルから見える白いアパートを指さした。

「オンボロアパートね」

「オンボロってなに？」りくとは目をぱちくりさせて聞いた。

「オンボロはオンボロよ」

りくとはしばらく考えるように首を傾けて、それからわーいオンボロオンボローと笑い出した。

「あなたママとパパは？」

「パパはいないよ、パパはねずつといないんだよ」

「じゃあママはどこにいるの？」

「んーっとね、ママはダーリンって人にあいに行ったよ、ぼく、ずっとママのこと待ってるんだ」

りくとは今にも泣きそうな顔で言った。

「泣いちゃだめよ、男の子なんだから」みづきも一緒に泣きたい気持ちになったが我慢した。

「うん、泣かない」

「でも、ダーリンって誰？ アメリカ人？」

「わからない、きっとチキュー人だと思う」

「そっかあ、でもママってずっと家にいるもんだと思うなイッパンカテイのフツーの家だったらさ」

りくとはみづきの言っている言葉がいまいち分からないといった様子できょとんとしていた。

「あたしねママとパパを探してるんだけど、あなた知らない？」

「知らない」りくとは首を横に振った。

「うーんほんとうに困ったわ」

みづきはしばらく考えてから言った。

「じゃあさあたしと一緒にママとパパを探そう、あなたも探検隊の仲間入りよ」

「たんけんたい？」

「そうよ、探したいものを一緒に探すの」

「いいよっ、ぼくはね、食べものをいっぱいさがすんだ」

「よしっ決まりね、探検隊の出発よ」

「しゅっぱつしゅっぱつー」りくとは手をたたいて喜んだ。

二人はゾウのトンネルを飛び出して旅に出た。



みづきは探検隊の鼻歌をりくくに教えてやり、二人で歌いながら歩いた。

うーうーうー、ふんふんふーんふん♪

やっぱり音楽って素敵だ、とくに二人で歌えばもつと素敵だ。

みづきとりくとは色んな鼻歌を歌いながら歩き続けた。探検隊の歌とかゲームの主人公が海を  
目指して歩く歌とかを二人で手を繋ぎながらハミングした。気がついたときには住宅地を抜けて  
いて、黄色と茶色と緑色の景色が広がるカントリロードを歩いていた。左手には田んぼと畑が  
広がっていて右手には木々が茂っている。

歌ってなんとか疲れを忘れながら歩いてきたけれど、みづきもりくともとても疲れていた。り  
くのお腹はさつきからずっとグルグル鳴っているし、真上にある太陽がガラガラしていてとて  
も暑かった。

みづきとりくとは木の陰で休むことにした。ちょうど田んぼ道とけもの道が分かれているとこ  
ろに二人で腰掛けた。けもの道の少し先の方にお地藏さんがいて首には赤ちゃんがするみたい  
な赤い前掛け、頭にはお侍さんみたいな山の形の帽子を被っている。ちよつとブキミだったからみ  
づきの腕には鳥肌が立った。

みづきはワンピースのポケットの中を探してクッキーを取り出した。

みづきはクッキーを割って大きい方をりとに渡して小さい方を食べた。

りととの体はちよつとだけヘンテコな匂いがしたけれど、みづきは我慢した。人の体のこととか、頑張つても変えられないことに悪口を言つてはいけないってパパが言っていたからだ。

「給食とか冷蔵庫とかママのお弁当があれば、もっとたくさん食べれるんだけどね」みづきは小さなクッキーをかじった。

「キューショクってなあに？」

「小学校のご飯よ。そっかあなたはまだ幼稚園だから給食ないのか」

「ぼくは、ようちえんいってないよ」

「じゃあ友だちいないの？」

「うん、いつも一人であそぶ」

みづきは少し悲しい気持ちになった。

「じゃああたしと友だちになったら良いじゃない」

「やったあ、友だちになった」りととは微笑んだ。

二人のクッキーはすぐになくなって、でもお腹はいっぱいにならずお腹がグルグル鳴り続けて

いる。

「食べものがさうよ、たんけんたいなんだから」

「そうは言ってもなんにもないじゃない、我慢しましょう」

りくとは不満そうな顔をして、傍らの草をむしって口に運んだ。

「だめよ、毒があるかもしれないじゃない、吐き出しなさい」

りくとはやだと言つて首を横に振つたが、何かを見つけた様子でお地蔵さんの方へ駆け出した。

「ちよつとどこ行くのよ」

「見つけたよ」りくとはお地蔵さんのお供え物の大福を手に行っている。

「だめ、そんなの食べたらバチが当たるかもしれないわ」

「やだ！ 食べる！」

りくとは両手で大福を持つてかじろうとするので、みづきはりくとの手を握つて止めた。

りくとは食べる！ 食べるんだ！ と叫び、みづきはぜったいだめ！ と必死で止めた。

二人がもみ合っていると、どこからともなく笑い声が聞こえてきた。

「ふおつふおつふおつふおつ」

とてもブキミな笑い声に二人はしんと黙り込んだ。

「食べなさい。なんぼでも好きなだけ食べたらええんや。」

お地蔵さんが喋っていた。

みづきとりくとはビックリしてひゃあと飛び退いた。

お地蔵さんは帽子を取って「いでよおいでよ」とおまじないみたいなのを呟いている。

すると帽子の中からポンポン大福とか果物が出てきた。お地蔵さんはヨッコラショといってあぐらをかいて座り、頭をポリポリ掻きはじめた。

「ほらほら、食べなさいな。遠慮せんといてや、なんぼでもあるから。」

みづきの隣でグウーと大きな音がした。りくとの方を見るとヨダレを垂らしながら指をくわえている。

「なんにも怖いことあらへん、ささ食べや。」お地蔵さんが大福をりくとに手渡した。

りくとは恐る恐るそれを受け取り、わあと小さく感嘆をもらし、大きく口を開けて大福をかじった。

「どや、べらぼうに美味しいやろう」

「うん！ おいしい！」りくとは笑顔で言った。

すると、みづきのお腹も大きく鳴ってお地蔵さんがすかさず大福を手渡した。

みづきも恐る恐る大福を受け取って、もぐもぐ食べた。

りくとは次から次へと色んな食べ物を食べて、満足そうだった。

「ぼく、もうお腹いっぱい」

そう言いながらもりくとは帽子の中から食べ物をとってポケットに詰め込んだ。

りくとのポケットはパンパンに膨らんでいて、おしくらまんじゅうみたいになっている。

「こら、そんなに欲張りしちゃ本当にバチが当たるよ」

「ちがう、ママもきつと腹ペコだから、ママのために持って帰るんだよ」りくとは頬を膨らませて言った。

お腹いっぱいになったみづきたちはお地蔵さんにお礼を言った。

「そんなん、子供が頭下げたりしたらアカンて。せやかて悲しい世の中になってもたなあ。ワシがヤクザやつとつた時代はなあ……まあ子供らにこんな話してもしやあないか。せやけど、ワシほんまに悲しいわあ。悲しくて悲しくてやりきれんわあ。」お地蔵さんはそう言って一筋の涙を流した。

「どうして泣いているの？」みづきはお地蔵さんに聞いた。

しかしお地蔵さんは元通り、喋らず動かず固まってしまった。

二人はお地藏さんと別れて再び歩き出した。

けもの道をずんずんぐくぐく進んだ。二人ともお腹いっぱいになって幸せな気持ちで歩いていた。突然みづきは足の裏に嫌な感触がして立ち止まる。きつと何かを踏みつぶしてしまったんだ。

恐る恐るゆっくり足をあげると、スニーカーの下で芋虫が死んでいた。緑色と黄色の血が飛び出していた。

とても気持ち悪くてひゃつと小さな悲鳴が漏れた。

「どうしたの」少し先を歩いていたりくどが振り返った。

「芋虫……踏んずけちゃった」

りくとは小走りで近づいてきて、みづきの足元にしゃがみこんで芋虫を見た。

「むしさん、しんじやったね」りくどが小さく呟いた。

みづきはふとパンチのことを思い出していた。

パンチはみづきの小学校の皆で飼育していたウサギだ。みづきは毎朝パンチに挨拶し、当番の時にはご飯をあげ、放課後はウサギ小屋を掃除した。パンチの背中を優しく撫でてやったし、とても可愛がってやった。クラスの皆はパンチのことがとても好きだった。もちろんみづきも。

けれどある朝のこと、パンチに挨拶しに行くとパンチは小屋の隅でうずくまって静かに死んでいた。

たった一人でパンチは寂しかったに違いない。みづきはとても悲しくなつて、とめどなく涙が溢れた。

いつも一緒にいてあげられなくてゴメンね、一人にしてゴメンねと泣きながら謝った。

みづきはクラスの皆とパンチのお墓をたててあげた。

パンチが死んでしまった時はとても悲しい気持ちになったのに、どうして芋虫が死んでも悲しくならないんだろう？ どうして芋虫を踏んづけてもゴメンなさいって気持ちにならないんだろう？ 芋虫が小さいから命の大切さも違うのか？ 芋虫の血の色が赤くないからなのか？ クラスの友だちが木の棒でナメクジを半分にちよん切ったときも、公園で男の子がセミの片方の羽をちぎって飛ばしていたときも、パパが蚊を両手で叩いたときもなーんにも感じなかったのは、どうして？

みづきは色んなことを考えた。けれど、考えても考えても無数のどうして？ が増え続けるだけだった。ずっと考えていると長い長い迷路のような終わりのない道を歩いているような気分になった。みづきには答えが見つけれなかったけれど、芋虫もパンチも新しく生まれ変わって欲

しいと、そう思った。

「ねえ、もしも生まれ変わるとしたら何になりたい？」みづきは突然りと質問した。

「うまれかわるって、へんしんするってこと？」

「そう、あなたは何に変身したい？」

りくとはちよつとだけ待つてと言つてしばらく考え込んだ。

「んーぼくはやっぱり、おっきな犬になりたいなあ」

「それはどうして？」

「だって犬はね、とっても遠くのおいが分かるから、食べるもの、すぐに見つけられるんだよ」

「とっても素敵だと思うわ」

「みづきは何にへんしんするの？」

みづきもしばらく考えた。

「あたしはね、サボテンに生まれ変わりたいな」

「どうして、サボテン？」りくとはみづきを見上げて聞いた。

「うーん、よくわからないけどサボテンが良いなって思ったのよ」

なぜだかみづきの頭にはトゲトゲしたサボテンのイメージが浮かんできて、それがとても素晴



らしいアイデアのように思われたのだ。

いったいどれほど歩き続けたのだろうか。陽は傾き、二人の影は長く伸びている。

みづきもりくとも歩き疲れた様子で口数は少なくなった。きつとりくとかいなかったら泣き出していたに違いない。歩いても歩いても見知った風景にたどり着けないからみづきは本当に泣きたい気持ちだった。

「なにか、歌おうよ」

りくとはみづきの手をとって、ねえねえ歌おうよと言った。

みづきは無理矢理に作り笑いしてりくくに歌を教えた。

それから二人でねこふんじやったを歌った。みづきがピアノ教室で習った歌だ。

ねこふんじやったーねこふんじやったーねこふんづけちゃったらひっかいた♪

ニャアアアー!!!

二人で声を合わせて歌っていると猫の大きな鳴き声がして、草むらの中から猫が飛び出してきた。

「まあミーコじゃない！びつくりさせないでよ」

白猫のミーコはフンつと鼻息をたてた。

「ミーコ？ このねこミーコっていうの？」

りくとはしゃがんでミーコを撫でている。

「そう、きつとあたしの後をつけてきたんだわ。ほんとうに寂しんぼさんねー」

みづきもしゃがんでミーコを撫でた。

ミーコは青い目を不機嫌そうに細め、顔をプイッとして二人の先を歩き始めた。

二人はしゃがんだままミーコを目で追った。

ミーコは道路の白線の上を歩くような気品のある足取りで尻尾をピンとたてながら進み、そしてピョンと高く跳ね上がったかと思うとポンツと音をたてて白い煙になった。

白い煙はもつくもつくと大きくなりだんだん人の形をした雲みたいになったかと思うと、今度は煙の中から大人の女の人が出てきた。とても背が高くてモデルさんみたいに細くて、黒い髪が男の子みたいに短い。女の人は黄色い縁のサングラスをかけていて、青と白のストライプのブラウスと白いミニスカートがとても似合っていた。

二人は呆然として女の人と互いの顔を交互に見た。

「ミーコ、へんしんしたよ」りくとは目からウロコといった様子だ。

女の人是一片手を腰に当て、もう片方の手でサングラスを外しブラウスに引っ掛けた。

うまく言葉にできないけれど、とても素敵な仕草だとみづきは思った。

「私、ミーコじゃありませんっ！ タマミです、タ・マ・ミ！」

「うわあタマミーコがしゃべった」りくとはイタズラっ子のような顔で女の人の名前をわざと間違えた。

みづきとりくとはタマミーコ！ タマミーコ！ とふざけ合った。

「あのね、私あんたたちより年上なのよ。もっと礼儀をわきまえなさい」タマミーコはほつぺたを膨らませて言った。

「タマミーコはなんさい？ ぼくは五さい」りくとは片方の手を広げた。

「私は百二十八歳よ。あんたたちよりずーっと長生きなんだからねっ」

みづきは指を折って百二十八を数えようとしたが途中でやめた。

「いくわよ、日が暮れてしまったら大変なんだから」タマミーコは二人の手を引いて歩き出した。

「どこに行くの？」

「今は言えない。とにかく急がないとね。猫の道を通ったらすぐだから」

みづきとりくとはタマミーコに手を引かれるままに進んだ。草むらの中を走り抜け、花のトン

ネルをくぐりぬけ、狭い路地を通って進んで進んだ。

「さあ、着いたわよ」

三人が到着した時、みづきとりくとの顔には汗が玉になってポツポツ浮かんでいた。タマミークは汗ひとつかかずに涼しそうだった。

「ここ、どこ？」

「あたし知ってる。神社でしょ」

「そう、ここは神社。それでね、えっと……」

タマミークは何かを言いたそうだけれど、苦しそうな顔で言葉が出てこないふうだった。

みづきとりくとはタマミークの顔をじっと見つめた。

「えっとね……あなたたちは本当はもう死んでいるの。だから今から天国に行くための儀式をしなくちゃならないの。」

みづきとりくとは信じられないといった様子できょとんとしていた。

「儀式って言っても、神様のお酒をちよっと飲むだけなんだけれどね……辛いだろうけど、どうしようもないの」

「うそだっ！ そんなのぜったいいうそだ！」りくとは泣き叫んだ。

「じゃあ、ママとパパにもう会えないの？」

みづきの瞳から涙がぼたぼた溢れ出し、地面にいくつものシミができています。

「……今は会えない。」

「いやだっ！ やだやだやだやだ」りくとは首を横にぶるぶる振って叫ぶ。

「嫌！ ママとパパに会えないなんて絶対に嫌！ あたし生きたい！」

みづきもりくと一緒に泣き叫んだ。

「お黙りなさいっ！」タマミークが大声で言った。

ふたりはハッとして黙り、肩を上下させながらタマミークを見た。

「ちゃんと儀式をしなかったら、あなたたちはずっとこの世に縛られてもう二度と天国には行けなくなるのよ。何も考えることなく、何も感じることなく来る日も来る日も同じ場所で漂ってるだけの幽霊になってしまう。そうしているうちに少しずつ記憶が無くなっていく。やがて何もかも忘れてしまって、大切な思い出も好きだった食べ物の味も匂いも、大事な人の声も顔もみんな思い出せなくなってしまうの。だから、私の言う事を聞いて。」

タマミークはそう言って二人を抱きしめ、頭を優しく撫でた。

みづきもりくともタマミークの胸の中でうわんうわん泣いた。

「大丈夫。天国に行けばきっと生まれ変わって大切な人に会えるから。」

タマミークは神社の中から神様のお酒を持ってきた。二つのお椀に注がれたお酒は黄金色に輝いていた。

「ほんとうに、ぼくたち、へんしんできるの？」

「ええ、私も生まれ変わったのよ。まあ私は前世でたくさん悪いことしたから千年もこうやって死者を送り届ける仕事をしなくちゃならないけど、あなたたちは大丈夫よ」

さあ、これを飲みなさい。そういつてタマミークは二人にお椀を渡した。

「おいしそうだね、これ」りくとはみづきに微笑んだ。

「あたし本当にまた、ママとパパに会える？」

「ええ、きっと。悲しいことや辛いことを残らずみんな溶かしてゆけるような、そんな日々が待っているから安心しなさい。」

二人は黄金色に輝く液体をゆっくり流し込んだ。

次第に二人の体も黄金色に輝きはじめ、徐々に体が半透明になってゆく。

みづきは頭がふわふわしてきて、とても愉快的な気持ちだった。少しづつ体が軽くなり、二人は宙に浮かび始めた。

二人は楽しそうにじゃれあいながら、風にたゆたいながら空高く飛んで行った。

\*

閑散とした住宅地にサイレンが鳴り響く。安っぽいアパートの壁に赤い回転灯がチカチカ点滅している。道ゆく人々は、学校・バイト先・家庭で話すための話題の匂いを嗅ぎつけて魚のごとく騒ぎの渦に泳いでいった。なお話題の鮮度は七日持てば良い方で、たいていは三日もすれば忘れ去られる。

呆然自失の夫婦が冷え切った死体安置所に案内され、娘の水膨れした白くて小さな姿を認めて泣き崩れた。

同時刻。赤髪の女は思い出したようにアパートに戻ってきていた。赤い回転灯と人だかりを何

事かと思ひながらぐり抜け三階の自室の前まで駆けた。女は制服を着た男たちに取り囲まれ、事の次第を聞かされて卒倒した。何も部屋から放たれる強烈な異臭のために倒れたのではない。

ある定食屋では、青年が井ぶりをかきこみながらテレビのニュースを横目でちらちら確認していた。

画面が切り替わり、テレビには少女誘拐殺人事件の文字と見覚えのある河川敷が映し出され、舌打ちをしつつも頭の中では逃亡の計画を立てる。

老人は騒ぎに群がる人だからなぞには目もくれず、遠くの空を眺めている。

空の遙か彼方で、夕日の光に紛れながら二つの不思議な光がふわりふわりと綿毛みたいに浮かんでゆく様子をその目で確かに認め、どこかしら悲しい気持ちに胸を痛めたのだが、その数秒後には全て忘れてしまった。そして老人の隣に白猫がやってきてニャンと鳴いた。



## 解説

## (蔵本コンタクト)

みづきは生まれ変わったらサボテンになりたいと言った。サボテンは強くて渴いた土地でも生きられる植物。そこには「傷ついても平気」「強く立っていたい」という願いが込められていたように思えた。

しかし実際には、彼女は誘拐という理不尽な暴力によって命を奪われてしまう。守る力を持たないと願った彼女が、最も無防備な形で犠牲になってしまったのは、とても皮肉で、やりきれない気持ちになった。

一方でりくとは犬になりたいといった。犬は人と深くつながり、愛情を受けて、寄り添って生きる存在。その言葉には、きつと「誰かに大切にされたい」「愛されたい」という願望があったのでは。

しかし現実の彼は、親からの虐待で命を落としてしまう。愛情を求めていたのに、その願いが最も裏切られる形になってしまった。

この二人の「なりたいたいもの」と「実際に迎えた結末」の対比がとても残酷で、でもその残酷さ

こそが現実存在していることを強く訴えかけてきた。

子供たちが望んだのはほんの小さな願い。「強くありたい」「愛されたい」。それなのに、それすら敵わないまま死んでしまった。

現実の世界では奪われてしまった夢やつながりも、天国では失われない。

彼らが愛したものの、求めたものは消えてしまわずに、心に残り続ける。

たとえば彼らの人生が短く、苦しみに満ちていたとしても、その心の奥底にあった「大切にしたいもの」は、永遠に守られているのだと思えるから。

# 神殿 (冒頭)

赤坂栗助

不穏な風が吹き抜けていった。ワラミネは神殿の一室で目を覚ますと、石柱に巻きついた蛍光チューブが明滅するのを横目に身震いし、恐る恐る息を吸った。森の甘い匂いがした。再び眠りに誘うような危険な香りだ。彼女は身を起こして、チューブの電圧が安定するまで、瞼を閉じて坐っていることにした。頭がずっしりと重かった。昨夜は遅くまで仕事に取り組んでいて、あまり寝ていなかった。その上にこの嫌な空気と来た。彼女は、頼まれた仕事は確かに終わらせたのだと思い出して、自分を元気づけた。一か月ほど前のこと、ソリドノから古い蓄音機を直してほしいと頼まれて、それ以来ずっと、彼女はこの機械に苦しめられていたのだった。

彼はワラミネの仇敵だった。ふと彼女の部屋を訪れては、いろいろなものの修理を頼むのだが、いちいち態度が高飛車で、癪に障るのだ。しかももち込むのは、どこかで拾ったのだという、どうしようもないがらくたばかりだった。

蓄音機の修理を頼みにやってきたとき、どんな経緯があつたかもう覚えていないが、彼は突然、「あなた方にはすぐ感心しているんです」と教えてくれた。「本当に。私の仕事は何というか、戦略と行動——そう、ある種の目的のために計画を練り、実行するといふものですね。相手は機械ではなくて、人や制度なんです。物質に特有の融通の利かなさはなくて、精密さの代わりに勇氣と感情が必要なんです。でも修理屋の相手はちつぽけな機械だ。きちんと動く

か動かないかは、純粹に技術的な問題です。そこにはヒロイズムも共感もない。この冷徹な世界でやっていくというのは、私にはまったく想像のつかない話です。ところで私のごく近所にも修理屋がいて、どんなにぼろぼろの機械でも元通りにすると評判の男なんですが、この機械を修理してくれないかと彼に尋ねたら、おおよそ一週間の納期で引き受けられると言うんです。『とてもない、一週間ですって！』と私は返してやりました。私の使命は本当に一刻を争うものなんですよ。そのことに蓄音機は関係ないと思われるかもしれないが、どっこい非常に重要な要素なんです。――むろん、そう、今回の修理はある種の好奇心に過ぎません。蓄音機が私に仕事に役立つかどうか、まだ確証をもてていないんです。私がこの機械に興味をもっていることは、どうかあまり人に言わないでくださいよ。とりわけ世話係の連中にはね。さて、それであなたを頼ることに決めました。なにしろ今まで何度かお世話になっているし、私が急いでいるという事情をわかってくれるだろうと見込んだからです……」

彼はこう言うと、両手に抱えていた蓄音機を彼の足元に置いて、数秒の間、太った体躯を優雅にねじってそれを見つめると、話は決まったという風に部屋を出て行こうとした。ワラミネは慌てて機械に駆け寄った。縦横が四十センチメートル、高さがその半分ほどの筐体の上に、真鍮のホーンがついている。巨人に踏み潰されたかのように上部が潰れていて、萎れかけの花びらみた

いだった。鉄針もどこかに行ってしまったている。アームの中央は筐体に擦れるほどに曲がっていた。背面のネジは錆びて役目を果たしておらず、力を込めるとすぐに板が外れ、内部を見ることができた。状態はひどいもので、振動板が破れているだけではなく、得体の知れない木片、金属片が散乱していて、そのなかで何匹かの蜘蛛が蠢いているのがわかった。

「これは、少なく見積もっても二週間かかるわよ」と、彼女は言ったのだが、ソリドノは「うん」とか「ふむ」といった類の曖昧な返事をする、神殿の柱と柱の間に消えていった。

そこまで思い出したとき、ずっと遠くの方で足音が聞こえた気がした。馬の蹄の音のようによく響いたが、注意深く聞くと、たくさんの人間が走っているのだとわかった。人間の素足と荒削りの大理石が触れ合う、やわらかい音だった。こちらに近づいてくる。彼女は振り返って目を細めた。四つの柱で構成された正方形の空間が連続してどこまでも続いている、最後には靄のなかに沈んでいた。しかし人の姿はなかった。

この場から離れた方がいいだろう、と彼女は直感的に思っ、ゆっくりと立ち上がり、そのまままっすぐ、部屋の反対側に据え置いてある栗の木の作業台に歩いていった。天板の上には、返却しなければならぬ工具や予備の部品が無造作に置かれていて、椅子の背もたれに下りひだ入り

の上衣が、四つ折りになってかけてあった。彼女は白い亜麻の下着の上からそれを羽織ると、机の上のものを両手に抱え、あたりをぐるりと見回した。足音はいっそう大きくなって、地面は地震が起きたかかのように揺れていた。急病人の家族が、身近に医者がいないうとき、よくこんな風にながむしやら走って助けを求めるものだ。何しろ広大な空間のなかで医者を見つけるのは容易なことではない。しかも神殿は迷路のように入り組んでいて、前方に見える部屋に辿りつくために、いつも直進すればいいというわけでもなかった。道順を知っていなければ簡単に迷子になってしまうので、そうした試みはいつも危険だったが、なくなりしなかった。

彼女は回れ右をして、柱の間をくぐり、足音から遠ざかるように部屋を出た。と、左手の柱の陰から突然、大勢の住民が飛び出してきて、ワラミネを見つけると行く手を阻むように彼女を取り囲んだ。いちばん前で隊列を率いていた女が一步前に進み出た。彼女は痩せていて背が低く、つむじがワラミネの鼻あたりの高さにあった。パニックに陥っているようで顔色が悪く、全身震えていた。鳶色のちじれた髪、細い鼻と唇、そしてしきりに目をしばたいていた。女は息を切らせながら、群衆に加わるように彼女を促した。ワラミネが首を横に振るのを見ると、女は一番近くに控えていた筋肉質の男の方を見た。

「限界です。もう戻らないと娘さんが危ないかもしれない」と、彼は言った。

女はうなずいて、彼女の腰を軽々と抱え上げると、人の群れのなかに投げ込んでしまった。そうして隊列は出発した。母親を先頭に、人びとが三角形の陣をつくっていた。彼らもやはりワラミネのように寝起きを狙われたか、非常事態に便乗してついてきている野次馬だった。先ほどの筋肉質な男は彼女の肩をがっしり掴み、三角形の中心に追いやったので、彼女はたくさんの頭と上衣の群れ以外、何も見えなくなった。男の腕を体から引き剥がしながら、彼女は言った。

「私は何も治せないわ」

男はうなずいた。そうして叫んだ。

「医者が見つかつた！」

人びとは手を振り上げて喜んだ。歓声と熱気のなかで、彼女が何を言おうと無駄だった。彼らの頭越しに見える石柱がものすごい勢いで過ぎ去っていった。右に折れたかと思えば左に折れ、隊列は複雑な道のりを進んだが、三角形はほとんど崩れなかった。代わりに、何ごとかか様子を見にきた住人が新たに加わるので、隊列は大きくなる一方だった。幸運なことに一行は、目的地までの最短経路を進むことができたようだった。隊列はちよつともしないうちに徐々に速度を落とすと、柱とチューブに囲まれた代わり映えのしない部屋に入っていくて、停止した。チューブのひとつはすっかり壊れている上に、留め具が外れて斜めにずり下がっていた。左手のベッドに



少女が横たわっていた。右手の作業台は、同じ間取りの隣の部屋のベッドとほとんどくっついていた。そこが母親の部屋なのだろう。少女はぎよつとして群衆を見た。それから結界を張るように彼らを見据えたので、人びとは怯えて後退し、押し合いへし合い、遠巻きに少女を見守った。作業台や母親のベッドに登る者さえ現れた。母親は住民の群れに分け入ってワラミネをもち上げた。少女の前に連れ出される途中、さっきの男の前を通ったとき、彼は言った。

「君は医者で、彼女は患者だ。俺の見たところ、何か精神的な問題を抱えている。そして君には助ける義務がある」

彼女がベッドの前に立ったとき、少女は助けを借りずに上体を起こして、群衆に向けたのよりは穏やかな視線でこちらを見た。顔色はよく、頬がこけているとか、四肢が痙攣しているということもなかった。母親が娘の背中をさすりながら、症状を話すように促した。ずらりと並ぶ野次馬の気配に圧倒され、娘はしばし躊躇していたものの、じきに口を開いた。

「あたし、きつともうすぐ鹿にのつとられるの」

ワラミネは彼女の言っていることが理解できず、一瞬、母親の方を見た。彼女は相変わらずの青白い顔で腕を組んでいて、自分の子供を見つめていた。ふと、朝起きたときに感じた甘い森の匂いが、ここでは一層濃くなっていることに気づいた。あまりにも強烈なので、ともすると周囲

のことを忘れ、陶酔して自分のなかに沈み込んでしまいそうだった。ワラミネは鼻からゆっくりと息を吸い、続きを聴くために少女に向き直った。

「自分でも、なんでそんな考えをもつはめになったのかわからないの」と、彼女は言った。

「自分で気づいたのはもうずいぶん前のことだわ。最初はただの妄想だって思おうとした。でもなぜだか、このばからしい考えを振り解こうとすればするほど、自分が鹿にのつとられる未来が避けようのないことに思える。しかも期日はどんどん近づいてきていると感じるの……。すごく恐ろしいものだっていう直感があったけれど、鹿にのつとられることが正確に何を意味するかわからなかったから、誰かに訴えたとして、どうやって証明すればいいのか見当がつかなかった。それでもいちど、どうにか勇気を出して友だちに全身を見せてみたことがあるわ。ふざけているふりをして服を脱いで、一周ぐると裸を見てもらった。で、さりげなく、どこかおかしいところはないかって尋ねたの。そうしたら彼女、特にないって言った。あたし怒ったわ。勇気を出して訊いたのに、向こうは真剣に取り合わないんだから。そんなわけないでしょうってあたしは言った。でも何度もしつこく迫ったら、彼女は気味悪がっちゃったみたい。気が狂っているんじゃないかっていう目でこっちを見て、怯えて逃げてしまった。ちょっと傷ついたわ。それで、あたしこの症状についてももういちど真剣に考えてみたの。順番がおかしいけれど、友だちに見てもら

ったことで、頭じゃなくなつて私の体のどこかがおかしいんだって確信がもてた。というより、自分がすっかりそう信じていると知ったという方がいいのかもしれないけれど……。それでちよつと氣力が湧いてきて、目を閉じて全身の神経を集中させてみると、さらに病氣がどんなものかわかつてきた――骨の関節よ、それも全身の。そこからのつとりが始まるんだと思うわ。間違いない。……ねえ、ワラミネさんとふたりにしてもらふことはできないの？」

少女はそう言つて、母親の方を見たが、女は何も言わなかったので、思わず野次馬に顔を向けた。彼女と目があつた群衆はすっかり狼狽してしまつた。そのうちのひとりがこわばつた奇妙な微笑を浮かべて遠慮がちに首を横に振つた。隣の若い男がその動作を真似た。それからまたその隣の眼鏡をかけた老人も首を振つた。そして数秒も経たないうちに、首振りが部屋に集まつてきたすべての人に伝染して、少女の願いを拒否した。少女は諦めた様子で、もつと近寄つてほしいとワラミネに頼んだ。母親には数歩、後ろに下がつてもらつてから、ワラミネの耳元でささやいた。

（続く）



あとがき

編集後記

## あとがき

### 紙漉遙梅

遅刻に遅刻を重ねて一年半、ようやく一作提出することができました。これからいっぱい書くぞ

### 黒田ももん

こんにちは。怠惰な大学生もどきです。近ごろは、やるべきことから目を背け、布団さんとのランデブーにふけています。今回は珍しく作品が短く（全作一万字以内！）収まりました。歓喜に打ち震えつつ、冗長なあとがきを書いていこうと思います。

「ひまわり」

二、三日で書き上げた話です。可愛い女の子しか出てこない話は、こうも筆が進むものなのですね。書き終わってから、プロット交換小説と微妙に構図が被っていることに気付きました。せ

つないですね。ちなみに、蝶の数え方は、「匹」や「羽」でなく「頭」が正しいそうです。

### 「送り花火」

古典的でベタな話になりました。今夏、近くで花火大会があり、久々に家の窓から覗いてみたのですが、よりにもよって終わりがけのタイミングだったので、一瞬ちらっと見ただけで終わってしまいました。とてもかなしかったです。

書きながら、牧野信一の「地球儀」を思い出していました。ですので、若干雰囲気引きずられていたところはあるかもしれませんが。かつてセンター試験で良くも悪くも話題となった作品ですが、さすがは牧野、やはり美しいなあ、と思います。

### 「春眠に風ぐ」（プロット交換小説）

以前も参加した企画に、また参加させていただきました。自分の書いたプロットは、みなも先生に託しました。やたらと人間目線な都合のいい猫さんになってしまい、本当に申し訳ないです。拙いプロットではありますが、爽やかで瑞々しい文体がとても魅力的なみなも先生の筆によって、どんな風に猫さんが生き生きと動き出すのか、とても楽しみにしています。

執筆側としては、作花霖先生の瑞々しいプロットをもとに書きました。普段は可愛い系男子を全く書かないので、かなり新鮮でした。しかし、花霖先生の風くんの「ねぼすけ！」は純真な男

の子という感じでとても可愛らしいのに、黒田ももん著の風くんの「ねぼすけ！」になると、ものすごく痛々しいやつに聞こえるのはどうしてでしょうか。花霖先生、誠に申し訳ありませんでした。どこか影のある捻くれた男子ばかり書いてきた人間には、ひだまりのような純真な少年はあまりにも眩しすぎたようです。もっと可愛げや愛らしさがほしいものです。

### 水面みなも

プロット交換小説企画に参加しました。イメージソングというほどではないですが、BUMP OF CHICKENの『K』という曲を思い浮かべながら書きました。新鮮で楽しかったです。

### 作花霖

今回、水面みなも様原作のものを小説に起こさせていただきました。本当に書いたことのないタイプの作品で、大変でしたがとてもいい経験になりました。少し成長できた気がします。素敵なプロットをありがとうございました。



## 谷山大哉

色々なことを詰め込もうと試みましたが手に余る感が否めない。

大どんでん返しや巧妙な仕掛けなど無い単調なお話です。

なにはともあれ、締め切りに遅れてしまい申し訳ない気持ちでいっぱいです。

## 赤坂栗助

まったく相談していなかったのにも拘らず、締め切りの前日に寄稿をOKしてくださった編貴様、ありがとうございます。実は前々号に、『神殿』という同名の掌篇を出しています。そのとき無限のグリッド空間である神殿という舞台を思いつき、使い勝手がよくたいへん気に入っているのですが、本作ではこの基本設定を受け継ぎながら、ストーリーを長めの短篇用につくり直しています。「続く」と書いて背水の陣を敷いてしまいましたので、近々きちんと完結させたいです。

## 編集後記

太陽と沈黙。

このテーマ、カッコイイ。これに見合うカッコイイ本を作らねば。

二つの言葉を見たとき、受けるイメージは正反対と言ってもいいかもしれません。太陽は明るく活発。沈黙は暗く重い。動と静。色で言うなら、赤と白。カラフルとモノクロ。

ですが、今年の猛暑のことを思うと、傍若無人にぎらぎらと地面を焼く太陽は本当に忌々しい。とはいえ夕方の方の幻想的な空に何度目を奪われたことか。そう、イメージなんて簡単に覆ります。必ず日は昇るとよく歌われますが、一方で、どうあがこうと必ず沈みます。強制的で残酷。ある人にとって夜は恐ろしく、またある人にとって朝は疎ましいものです。

沈黙はどうでしょう。授業中、いきなり始まったグループディスカッションで訪れる静けさほど怖いものはないと思います。沈黙が長引けば長引くほど口を開けなくなり、視線が迷子になる。

しかし、気心の知れた友人との会話でふいに生まれる空白は、不思議と心地のいいものです。

あなたにとって、太陽と沈黙はどんなものですか？ そのイメージの先にはきつと、あなたらしい、あなただけの世界が広がっているはずです。我が児童文学研究会の皆さんはどうでしょうか。今回掲載されている作品が太陽と沈黙をどのように描いているのか、心ゆくまで味わっていただけると幸いです。

その他にも、プロット交換小説やテーマ外作品を書いていただきました。作者の方々が紡ぎ出す世界は十人十色です。ぜひ、余すところなく堪能していただきたいと思います。

最後に、この部誌を手にとってくださった皆様、本当にありがとうございます。充実した読書の秋の一助となることを願います。

編 貴

児童文学研究会は、六甲台第一キャンパス・グラウンド横にある部室で活動を行っております。興味を持たれた方は、ぜひお気軽に部室を訪ねてみてください。

ご意見・ご感想は下記アドレスまでどうぞ。

doubun12345@gmail.com

ホームページもよろしくお願いします。

<https://doubun1234.wixsite.com/doubun>



X（旧 Twitter）では活動状況の報告を行っております。

[https://twitter.com/KU\\_dbn](https://twitter.com/KU_dbn)



---

## すぎかえる 263 号 太陽・沈黙

2025 年 10 月 23 日 第 1 刷

著 者

編集責任者

発行責任者

発 行 元 神戸大学児童文学研究会

---